

大坂奉行所刑事判決例二十七題：近世中葉大坂地方 に行はれたる刑事的法則(三)

金田, 平一郎
九州帝国大学法文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/14446>

出版情報：法政研究. 9 (1), pp.155-216, 1938-11. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：



大坂奉行所刑事判決例二十七題

—近世中葉大坂地方に行はれたる刑事的法則(三)—

金 田 平 一 郎

目 次

脅 迫 の 罪
『隠 賣 女』の 罪
姦 淫 の 罪
殺 傷 の 罪
婚 姻 妨 害 の 罪
『狼 籍』の 罪
詐 偽 の 罪
横 領 の 罪

脅 迫 の 罪

第三十二判決例 (「諸御用御窺書」明和四亥年乃至五子年の分收録)

大坂奉行所刑事判決例二十七題

御城代松平和泉守殿」口書懸り八田五郎左衛門片山市允」御役所門番所に致投ケテ候一件」御仕置窺書」
 鶯殿出雲守」亥四月廿五日吟味七月廿二日口書しらへ八月廿五日伺下ル同廿七日落着(朱)」當四月八日夜
 私御役所門番所に投ケテ有之候ニ付披見仕候處立賣堀南裏町大和屋秀次郎家守帶屋佐兵衛支配之借屋阿波
 屋半次郎與名印有之家守佐兵衛并家請人ノ家人入之由ニ而嚴敷致催促候故諸道具等も荒方賣拂立退キ候之
 處先々町々迄佐兵衛ノ相届候儀有之候故妻子四人共可立寄方無之漸九條村ニ借家借リ請候處佐兵衛并家請
 人申合罷越右之通にてハ御役所表不相濟候間元借家に立歸吳候之様申候得共得心ニ候故其段申答候處宅
 替入用何程有之候共佐兵衛致世話可遣間是非立歸候様相頼候ニ付乍心外當四月五日元借家に立歸候處諸色
 等引取吳候迄ニ而其余之致世話吳不申候ニ付身分難立行家出いたし候間妻子は家主ノ養育いたし候様仕度
 趣認有之ニ付半次郎并妻子所之者をも呼出候處半次郎儀ハ同月八日ノ罷出行衛不相知旨申之元來半次郎儀
 ハ捨子養居候者ニ而家守佐兵衛取斗不念之儀共相聞に候ニ付所預ケ申付半次郎妻子ハ右町内より心を付候
 様申渡半次郎儀者所之者に尋中付置候之處同月廿四日立歸候旨ニ而召連出候ニ付半次郎者入牢妻子共者所
 預ケ申付一件吟味仕候趣右之通ニ御座候」亥四月廿五日入牢立賣堀南裏町大和屋彦次郎家守帶屋佐兵衛支配
 之借屋阿波屋半次郎亥三拾八歳」右半次郎儀小間物商ビ渡世仕女房つね并悴元次郎一所ニ山本町天満屋佐兵
 衛借家ニ罷在候節四年以前申十月つね儀男子出産仕同日右出生之悴者相果候處同十一月廿一日長堀拾丁目
 永樂屋六兵衛借家粉屋安兵衛濱先キニ當歳之男子捨有之趣及承つね儀乳も澤山ニ御座候ニ付半次郎其節之

相借家大和屋源兵衛請人ニ取養子ニいたし度旨同十二月八日源兵衛六兵衛申合願出候上」右捨子半次郎養子ニ仕度旨源兵衛六兵衛申合私御役所に願出候ニ付承届末ニ倉抹ニ無之様養育いたし可遣旨申渡置候^(朱)「
養育銀貳百目差添貫ひ請卯之助與名付養育いたし去戌十月鐵町布屋庄兵衛を家請ニ相頼當時之借屋に宅替仕候處半次郎儀近頃病身ニ相成リ渡世難送家賃迄相滞らせ候故當二月下旬ノ家人用之由ニ而家守佐兵衛ノ家明申付家請人庄兵衛俱々致催促候ニ付同三月廿日兼而心易いたし候權右衛門町和泉屋喜兵衛借屋江戸屋清兵衛を相頼家内諸色引取貫ひ夫々富嶋貳丁目高津屋幸七借家阿波屋市助方に引越同人世話を以飯塚伊兵衛御代官所攝州西成郡九條村百姓作右衛門借家を借請候筈ニ相對仕候處」右清兵衛市助呼出吟味仕候處半次郎儀清兵衛ノ市助方に引越候上直ニ九條村ニ而借家借リ請候様ニ及承候故其趣佐兵衛に申聞置半次郎に借家借シ渡候哉之譯市助ノ右作右衛門に引合居候内家守佐兵衛ノ半次郎妻子共呼戻シ候事之由申之ニ付作右衛門をも呼出吟味仕候處市助同事ニ申之九條村に者半次郎名前差出候儀無之旨申之清兵衛市助作右衛門三人共不埒之筋相聞に不申候^(朱)「元家守佐兵衛儀右之様子承リ候由ニ而捨子養子ニ仕候ものニ付外に引渡候儀者容易ニ難相成趣ニ候間元借家に立歸リ候様家請人庄兵衛俱々申聞候得共借家相仕廻候節物入等も有之候故難立歸旨申答候處右物入者佐兵衛引請可致世話旨申ニ付同四月五日元借家に立歸リ候處諸色等引取吳候迄ニ而其餘之世話いたし吳不申身上難立行佐兵衛いたし方腹立ニ存半次郎家出仕妻子者佐兵衛より世話いたし候様相頼候旨前段之通書付認御役所に投ヶ込置候ハ、吟味之上佐兵衛ノ妻子共育候様申付候儀

も可有之與存右之手續相認同月八日七ツ時頃ハ罷出」右半次郎女房つね呼出吟味仕候處當四月八日半次郎儀居宅を罷出候迄之手續は申口符合仕候然ル處其夜不罷歸候ニ付不審ニ存方々相尋居候處奉行所に呼出し候上ニ而投ケ文仕欠落致シ候様子承リ驚入候由申之其段無相違相聞に申候且又忤共儀者幼少之ものニ付吟味不仕候(朱書)「同夜御役所門番所に投ケ文いたし置夫ハ伊勢路に罷越候得共篤と相考候處妻子とも捨置欠落仕候儀ハ不實成ル儀與心付候ニ付家守佐兵衛に熟談仕身分立行候様相頼可申與存立歸リ候事之由申之ニ付右申口者偽リニ而實者半次郎儀佐兵衛ニ兼而意趣有之に付遺恨を爲可晴惡ル品ニ相認投ケ文仕候儀ニ可有之間有躰可申旨重々吟味仕候處前段申口之通少茂無相違外ニ意趣有之候而之仕業ニ者毛頭無御座候併佐兵衛に申分有之者得と應對仕其上ニも譯立不仕候ハ、奉行所に願出吟味を請可申處無其儀右之通投ケ文いたし捨子養子ニ仕候身分ニ而妻子を殘し置欠落仕候段吟味之上重々無申披誤候旨申之候」所預ケ右家守帶屋佐兵衛三拾貳歲「右佐兵衛儀庄兵衛を家請ニ取半次郎を支配之借家ニ差置當二月下旬清兵衛に引渡候迄之手續ハ半次郎同事之申口ニ而半次郎儀者捨子貰ひ請居候もの故其段居町年寄若狹屋與三兵衛に申聞候左候ハ、其趣可訴出事ニ候旨申候ニ付」右與三兵衛呼出シ吟味仕候處佐兵衛申口符合仕不埒之筋相聞に不申候(朱書)「同月廿七日訴出候處半次郎同請人源兵衛ハ捨子有之候元町をも申合罷出候様申渡候ニ付相驚」此儀佐兵衛申口之通申渡候段相違無御座候(朱書)「清兵衛家主喜兵衛に茂右之趣可相届と存罷越候處喜兵衛儀在方に參留主ニ付一兩日見合居候得共不罷歸候故清兵衛方に罷越半次郎居所相尋候之處九條村に罷越候由

申之ニ付在方に引越候而は如何與存其趣佐兵衛ハ庄兵衛ニ申通シ俱々半次郎居所相糺候處前書ニ有之市助方ニ罷有候ニ付元借家に立歸リ候様申聞尤入用等之儀ハ少々致世話可遣旨申聞候上呼戻シ候事ニ而」右喜兵衛呼出吟味仕候處喜兵衛儀者在方に罷越居候ニ付様子不存候由庄兵衛儀者半次郎儀捨子養子ニ仕候もの由承候ニ付相驚佐兵衛俱々居所相糺元借家に呼戻シ候事之由申之佐兵衛申口符合仕不埒之筋相聞に不申候(朱)」半次郎諸色等者佐兵衛世話いたし引取遣猶入用之儀茂有之候ハ、半次郎ハ可申來與存居申候内同九日佐兵衛呼出半次郎儀御役所に投ケ文いたし置家出仕候段吟味之上初而承リ驚入候半次郎儀捨子養居候者ニ候得者清兵衛方に不引渡以前居町年寄に相届半次郎并捨子養候節之請人元町をも申合罷出其趣相斷候上ニ而可引渡處其儀不心付其上半次郎を元借家に呼戻候節入用之儀者世話いたし可遣旨相對乍仕入用之儀も候ハ、半次郎ハ可頼參與存其儘打捨置候故半次郎儀佐兵衛取斗方を恨投ケ文いたし欠落仕候様ニ相成候段不行届仕方不念之至」吟味之上無申披誤候旨申之候」右之者共御仕置黃紙下ケ札を以奉窺候以上」亥七月「鶉殿出雲守」御城代松平和泉守殿御附札」此半次郎養候捨子妻を殘シ致欠落其上家守佐兵衛に遺恨有之候ハ、願方も可有之處投文致候段奉行所を蔑ニ致候段不届ニ付攝河兩國拂可被申付候」此半次郎儀捨子養置候身分ニ而妻子を殘シ欠落仕其上家守佐兵衛に對シ申分も有之者其段願出吟味をも請可申處無其儀佐兵衛取斗方悪ル品ニ相認御役所門番所に投ケ文仕候段奉行所を不恐仕方不届御座候間重追放可申付哉」

(御城代附札也)

此佐兵衛事半次郎を店立爲致候ハ、捨子貰候節之請人其外町役之者申合奉行所に可訴出處無其儀

壹人立訴出奉行所申渡ニ而驚半次郎を呼戻其上約束を變候ニ付半次郎致欠落候様相成候段不埒之取斗ニ付三十日押込申付貰置候捨子は佐兵衛引取致養育追而望之もの有之節申出候様町内之者にも可被申渡候一此佐兵衛儀借屋之内半次郎ハ捨子養置候者ニ付清兵衛方に引渡候ハ、半次郎并捨子養候節之請人元町をも申合罷出其趣相斷候上ニ而可引渡處無其儀引渡濟候跡ニ而佐兵衛斗斷出右之者共申合罷出候様申渡候ニ付相驚半次郎行先をも相糺入用等之儀者致世話可遣候間元借屋に立歸候様致相對乍置熟談不仕ニ付半次郎儀佐兵衛仕形を恨投ケ文いたし欠落仕候様ニ相成候段全佐兵衛取斗不行届故之儀與相聞不埒ニ御座候間三十日押込申付半次郎方ニ養置候捨子は佐兵衛方に引取養育仕らせ置養人有之候ハ、所之者ハ訴出候様可申渡哉一阿波屋半次郎御仕置例(朱書)「宿なし忠兵衛」右忠兵衛儀養父津村北之町伊丹屋太郎兵衛借屋伊丹屋次兵衛手前金子取込仕候身分ニ而南塗師屋町大和屋孫兵衛借屋吉野屋久兵衛方に罷越借家借リ吳候様相頼得心不仕候迎其儀を憤火札を張り候ハ、家主年寄杯相驚久兵衛を宅替仕らせ難澁可仕與存久兵衛ニ意趣有之ニ付火を付焼拂候趣案詞相認宿なし嘉内手跡ニ而認貫ひ久兵衛町内三ヶ所ニ張置候段不届ニ付私懸リニ而奉伺候處其後病死仕三年以前酉七月御下知有之存命ニ候ハ、死罪可申付旨被仰渡候一但此度相伺候半次郎儀は投ケ文いたし候義ニ而火札を張り候とハ譯も違ひ工之筋も輕ク御座候得共意恨を合候儀は似寄候ニ付右類例を以黄紙之通相伺申候(朱書)「帶屋佐兵衛御仕置類例(朱書)」片桐帶刀知行所河州讚良郡木田村百姓喜八同家親惣七」右惣七儀工を以泰村新七ハ證文取置候事ニは無之候へ共新七義は新ニ銀子借請候心得ニ而彼是

申争腹立之躰ニ而罷歸候事ニ候ハ、新七方に惣七罷越納得致シ候之様篤與申談候上ニ而證文請取置可申處
其儘ニ差置候故身分難立様ニ存詰メ相果候及思儀ニ候段全惣七取斗不行届故之義不念ニ付私掛リニ而相伺
去る酉年四月御差圖之上三十日押込申付候「見出し」押込差免候儀御届申上候書付「鶉殿出雲守」立賣堀
南表町大和屋彦次郎家守帶屋佐兵衛「右は御役所門番所に致投ケ文候一件之内ニ而先達而御仕置之儀相窺
御差圖之上先月廿七日ノ三十日押込申付置候處昨廿六日迄ニ而日數相滿チ差免候ニ付此殿申上候以上」亥
九月廿七日「鶉殿出雲守」口書掛リ八田五郎左衛門片山市允

此判決例中に引照の阿波屋半次郎御仕置例に依つて、近世中葉大坂に於ては、脅迫の罪（少くとも所謂）死罪の
原則が行はれたことを知り得られるが、之は、「公事方御定書」下巻第六十三條「火札張札捨文いたし候もの御
仕置之事」（「徳川禁令考」後葉）第三帙五〇〇頁）の條の

寛保二年極

一遣恨を以火を可附旨張札又ハ捨文致候もの

死 罪

と、同一法則であつた譯である。

(7) こゝに張札（火札）の一二の實例を示して見よう。例へば、八田五郎左衛門の「盜賊吟味役日記」寶曆十一年十二月の分）

に、『十二月朔日……一南鍋屋町中嶋屋次兵衛并同家倅伊兵衛兩人に恨有之間宅替爲致候歟又ハ家守役退ケ可申候
無佐も候而は丁内に難義懸ケ候旨年寄并丁人共宅にも所々に張札いたし置候旨ニ而差出ニ付右書付當御役所に相渡候様

大坂奉行所刑事判決例二十七題

被仰出候旨東當番ノ申來ニ付即刻聞合申付置候事』、又同上（十三年四月の分）に、『四月廿日……一天滿九丁目伊丹屋市右衛門かしや若狭屋長兵衛儀天神地内靈府之内ニ居候ものニ候所右長兵衛差置候ハ、黒土ニ可致由家主并神主門柱に張札いたし候由天滿長吏内意申來候事』。

『隱 賣 女』の 罪

「公事方御定書」下卷第四十六條『養娘遊女奉公に出シ候もの之事』（「徳川禁令考」後聚）の條に、

享保十八年極

一 輕キもの養娘遊女奉公に出シ候もの

實方より訴出候共

無 取 上

但卑賤之者養子ニ遣候ハ實方ニも其心得可有之事ニ候間證文有之候共無取上（下）

なる法條があるが、之は、卑賤者同志が遊女身賣的な養娘縁組を爲すに際し、將來養娘を遊女奉公に出さないと云ふ契約を附け加へても、法律はそれに對して保護を與へない、と云ふ規定と解すべきであらう（拙文ニ不作爲の文・徳政擔保文言附證文）。
―本誌四卷二號―五頁以下）

果して然りとすれば、此規定に依つて、普通の養女縁組の此種の附款は法律上保護せられる、と云ふ原則の存在が推測せられるであらう。次に然らば、その保護は如何なる形に於て實現せられたか、此點に關して御定書は何等規定する所がない。しかし當時大坂に於て、此種の契約に違反せる場合を犯罪となし處罰して居る（次掲第三十四判決

例の和泉屋由兵衛に對する判文）事實から推して、少くとも江戸にても亦、此種の不作爲給付契約違反は、不法行爲であり犯罪であつたと考へられはしまいか。

更に此原則は、此種の契約の附隨しない場合、即ち普通の養娘縁組關係に於ては、將來養女を遊女に出すも、何等不適法ではなかつたと云ふ制規の存在を物語るものであらう。而して更に、賣淫そのものを、當時適法とせるものであることを示すものである（此原則に就いて初めて、明白なる事實ではなく、周知の事作らるる）。

しかし當時と雖も、遊女行爲は、それが公然適法である場合に許容せられると云ふのであつて、所謂『隠賣女』行爲は不法とせられ犯罪となされたのである。

今以下に、徳川中葉時代の、大坂に於ける隠賣女處斷例を掲げて、當地方此方面の制裁の實際を紹介しよう。

第三十三判決例

〔御吟味物料書并御伺書控「收録」〕

寛保三亥年（朱）掛役人田中宇右衛門早川友右衛門（朱）富嶋貳丁目隠賣女一件片付窺書「亥六月」掛り佐々美濃守松浦河内守「富嶋貳丁目丸福屋四郎五郎借屋淡路屋九左衛門忤喜助儀當三月廿九日之夜同町大津屋伊兵衛支配之借屋堺屋喜兵衛門」先ニ致殺害有之ニ付一件詮儀仕候内右町内ニ而隠賣女差置渡世いたし候者相顯本人井家主年寄町人吟味之趣左之通ニ御座候「亥四月九日入牢富嶋貳丁目大津屋伊兵衛支配之借屋堺屋喜兵衛富亥六拾九歳」黃紙御下ヶ札寫（朱）「此者茶立女定之外多抱渡世いたし候段不届ニ付諸色取上ヶ可申哉（朱）書」右喜兵衛門ト先ニ而三月廿九日之夜淡路屋九左衛門忤喜助を殺害いたし候は御船手奥田

八郎右衛門組水主之内岩本彌市植村清藏ニ候旨風聞有之喜助を致殺害候は喜兵衛門ト先之事ニ候得は口論之様子存居可申與呼出相尋候處廿九日之夜臥候迄口論ケ間敷事無之翌朝門ト先明ケ候而殺害人有之を見請候由喜助を致殺害候は何者ニ候哉曾而不存旨申之候且又喜兵衛儀茶屋商賣渡世之者ニ而茶立女定之外多抱置候儀此度相顯候ニ付吟味仕候處茶立女兩人之外數多差置候は不埒之事ニ存候得共兩人斗にてハ渡世成兼候ニ付人數多抱渡世仕來候此段吟味之上無申披旨申之候一亥四月九日入牢富嶋貳丁目會所屋敷家守近江屋平右衛門支配之借屋堺屋利兵衛當亥三拾九歳「黃紙御下ケ札寫(朱書)」此者御法度之隱賣女抱渡世いたし候段不届ニ付諸色取上ケ百日手鎖懸ケ所之者に預ケ隔日封印改可申付哉(朱書)一三月廿九日之夜淡路屋九左衛門悴喜助を殺害いたし候は御船手奥田八郎右衛門組水主之内岩本彌市植村清藏ニ候旨風聞有之右利兵衛方へは兼而八郎右衛門組水主共罷越候趣ニ付廿九日之夜利兵衛方に彌市清藏參口論ケ間敷事其外怪敷存候儀無之哉與相尋候處其夜致他行候ニ付若留守之内に兩人參候哉様子一切不存由(此間朱書)「喜助を殺害いたし候は何者ニ候哉心當無之朔日之朝ニ至り殺害人有之を見付候旨申之候且又利兵衛儀兼而隱賣女差置渡世いたし候儀此度相顯候ニ付吟味仕候處身賣女差置渡世いたし候は不埒之事ニ存候得共身上不如意にて困窮之餘リ身賣女抱渡世仕來候段吟味之上無申披旨申之候一(次に中村屋文右衛門、津國屋文右衛門、伏見屋七兵衛に對があるも今)」伊兵衛所預ケ富嶋貳丁目大津屋伊兵衛重病ニ付代忠兵衛當亥三拾九歳「黃紙御下ケ札寫(朱書)」此者支配之借屋内茶立女定之外多抱有之其上隱賣女差置渡世いたし候者有之を乍存不相糺候儘ニ差置候段

不届ニ付家財不殘取上ケ候上百日手鎖懸ケ所之者に預ケ隔日封印改可申付哉(朱書)「白紙添御下ケ札寫(朱書)」
此伊兵衛儀當時重病ニ候得は手鎖懸ケ候義難仕候所之者に預ケ押込申付置快氣次第手鎖懸ケ可申哉と奉存候(朱書)
「右伊兵衛儀天満宮之前町若狹屋仁兵衛懸ケ屋敷家守相勤候處借屋之内中村屋文右衛門津國屋文右衛門儀隱賣女差置渡世いたし堺屋喜兵衛方ニは茶立女定之外多抱渡世いたし居候段淡路屋九右衛門喜助を殺害いたし有之吟味ハ相顯候ニ付右躰之不埒成ものを借屋内ニ差置候は伊兵衛得心ニ而可有之旨吟味仕候處中村屋文右衛門津國屋文右衛門方ニ隱賣女有之堺屋喜兵衛方には茶立女定之外多ク抱渡世いたし候由風聞承候得共町内衰微之節借屋之者共嚴敷致吟味候ハ、不繁昌ニ可相成と存不改差置候事ニ而最初ハ伊兵衛得心ニ而身賣女抱させ候儀ニ而ハ會而無之由不埒之渡世いたし候者借屋之内ニ有之段承候ハ、早速改相止させ可申處無其儀吟味之上無申披旨申之候」所預ケ富嶋貳丁目會所屋敷家守近江屋平右衛門當亥四拾貳歲「黃紙御下ケ札寫(朱書)」此者支配之借屋内ニ隱賣女差置渡世いたし候者有之を乍存不相糺其儘ニ差置候段不届ニ付家財不殘取上候上百日手鎖懸ケ所之者に預ケ四日目封印改可申付哉(朱書)「右平右衛門支配之借屋堺屋利兵衛伏見屋七兵衛儀隱賣女差置渡世いたし候ニ付平右衛門儀得心之上借屋ニ差置候ニ而可有之旨吟味仕候處堺屋利兵衛借屋伏見屋七兵衛方ニ身賣女抱候趣風聞有之故可相糺と存候得共右借屋ハ近頃町内ニ相求近々ニハ普請等いたし會所ニ取繕候故其節利兵衛七兵衛とも借屋明させ可申與存不相糺由乍然不埒之渡世いたし候與申儀風聞承候ハ、早速改暫ニ而も其通りニ致置間敷處無其儀段吟味之上無申披旨申之候」

所預ケ富嶋貳丁目高津屋幸七當亥四拾三歲「黃紙御下ケ札寫(朱書)」此者町内借屋之内隱賣女差置致世話候者有之を其儘ニいたし置候段不届ニ付家屋敷家財取上ケ可申哉(朱書)」右幸七借屋を同町堺屋利兵衛同家之倅熊治郎名前ニ而出店ニ借り請隱賣女差置候段利兵衛申之ニ付幸七儀得心之上借屋ニ差置候ニ而可有之旨吟味仕候處町内ニ隱賣女有之ニ申風聞承り候得共右躰之儀渡世いたし候者を相糺候ハ、改嚴敷ニ申觸借屋借り請候者も無之様ニ可成與存是迄不改差置候由然共不埒之渡世ニ候得は借屋之内相改右躰之者ハ差置間敷ニ存居候内此度吟味ニ相成候是迄改疎ニいたし身賣女抱渡世之者借屋ニ差置候段吟味之上無申披旨申之候」所預ケ富嶋貳丁目鴻池屋八兵衛當亥四拾貳歲「黃紙御下ケ札寫(朱書)」此者町内ニ隱賣女差置致渡世候者數多有之堺屋喜兵衛方ニは茶立女定之外多差置候を不相糺其上會所屋敷ニ求メ置候所ニも隱賣女有之候會所屋敷之義ハ年寄町人持家之事ニ候得ハ別而可相糺處猥ニいたし置候段重々不届ニ付家屋敷家財取上ケ可申哉(朱書)」右八兵衛年寄役相勤候處町内堺屋喜兵衛儀茶屋商賣之者ニ而定之人數ハ茶立女多抱置堺屋利兵衛中村屋文右衛門津國屋文右衛門伏見屋七兵衛方ニは隱賣女差置利兵衛儀は倅熊治郎名前ニ而町内ニ致出店熊治郎方にも身賣女差遣渡世いたし候を不相糺其儘ニ差置候段八兵衛得心ニ而可有之旨吟味仕候處隱賣女差置渡世いたし候者有之由承候得共相糺候ハ、不繁昌ニ可成與存改ゆるかセニいたし置候由尤謹儀隱賣女差置候哉不存此度吟味之上初而承候乍然不埒之風聞有之候ハ、早速相改可申處無其儀段吟味之上無申披旨申之候」一堺屋利兵衛伏見屋七兵衛儀は一町ノ會所屋敷ニ求置候所を借り請隱賣女差置候會所には年寄其外

町人共每度寄合候事ニ候得は右躰之不埒成渡世之もの不見請とハ被謂間敷旨吟味仕候處右會所之儀は近比相求候屋敷ニ而普請等いたし會所ニ取繕可申與存候得共急ニ借屋引拂せ候儀難儀之旨町人共申之ニ付屋敷裏之方ハ致普請懸リ會所屋敷與定有之候得共未町人共得與寄合候儀無之候故利兵衛七兵衛儀身賣女抱置候哉是迄不存罷在候會所屋敷之儀は年寄町人持家之事ニ候得は別而相糺不埒之者差置間敷處猥ニいたし置候段旁吟味之上無申披旨申之候「富嶋貳丁目町人共」黃紙御下ケ札寫(朱)「此者共町内ニ隱賣女差置候者多有之を不相糺其上會所屋敷ハ物町人持家之事ニ候處會所屋敷ニも隱賣女有之を其通ニいたし置候段重ニ不埒ニ候得共壹人ニ而持候家とハ違町内なからも格別家守付置候事ニ候得は銘ニ答申付候ニも及申間敷哉乍然家守付置候迎も近所之儀ニ候得は可相糺處無其儀家守任ニいたし置其上、一町ニ右躰之商賣いたし居候者多ク其儘ニいたし置候段旁不埒ニ候得は惣町人にも爲過料隱賣女差置候會所屋敷不殘取上ケ可申哉(朱)」白紙御下ケ札寫(朱)「此家屋敷質物ニ入有之候科人之諸色不殘取上ケ候節質物ニ入有之候得共取上候上質代銀質取主に相渡賣ヘキ銀斗欠所ニ取上ケ候儀御座候此會所屋敷過分之質物ニ入一向賣ヘキ銀ハ無之趣ニ相聞候家屋敷取上候而も賣ヘキ銀無之家屋敷質取主へ相渡候得は名目斗ニ而當人ニ之答は無之道理ニ相成候此度會所屋敷取上候儀一町ニ之過料之儀ニ候得は質物ニ入有之儀ニハ不拘家屋敷之直段程銀子ニ而取上可申哉と奉存候(朱)」右町人共會所屋敷ニ求置候借屋内堺屋利兵衛伏見屋七兵衛方ニ隱賣女差置渡世いたし候ニ付會所屋敷之義は年寄町人持家之事ニ候得は別而可入念處無其儀不埒ニ付吟味仕候處會所屋敷ニ可仕

與求置候所ニ隱賣女差置候者有之を不相糺其儘ニいたし置候段惣町人共不念之段吟味之上無申披旨申之候」
 天滿宮之前町若狹屋仁兵衛當亥三拾七歲「黃紙御下ヶ札寫書」此者懸ヶ屋敷之内隱賣女差置候者有之を家
 守任ニいたし不相糺段不埒ニ付賣女差置候所之家屋敷取上ヶ可申哉書」右仁兵衛懸ヶ屋敷當鳴貳丁目
 有之所右懸ヶ屋敷借屋之内中村屋文右衛門津國屋文右衛門儀身賣女差置堺屋喜兵衛儀は茶立女定之外多拘
 置致渡世候を其儘ニ差置候段仁兵衛得心ニ而可有之旨吟味仕候處右懸ヶ屋敷ハ大津屋伊兵衛を家守ニ付置
 候事故如何躰之者差置候哉一切不存由乍然家守付置候迎も自分借屋之儀ニ候へは得と相糺不埒之者差置間
 敷處無其義段吟味之上無申披旨申之候」堺屋利兵衛抱身賣女」所預ヶ志やう當亥廿一歲同小さん當亥十六
 歲」同とよ當亥十九歲同きよ當亥十九歲「黃紙御ヶ下札書」此者共御法度之隱賣女得心ニ而相勤候段
 不埒ニ付傾城町に三ヶ年差遣年季過候上奉行所ハ親元へ差返し可申哉書」伏見屋七兵衛抱身賣女」同ひ
 さ當亥十九歲同ぬい當亥十八歲右之者共身賣女相勤候ニ付呼出し吟味仕候處何れも下女奉公之相對ニ而奉
 公ニ出候上主人依頼ニ得心ニ而身賣女相勤候段申之候」中村文右衛門方ニ而身賣いたし候かな義は當四月
 朔日病死たつ義は同五月七日病死仕候津國屋文右衛門方ニ而身賣いたし候ふじ儀は當四月暇差出代り之者
 可差置と存居候間吟味ニ相成中村屋文右衛門津國屋文右衛門抱之女只今ニ而ハ無御座候且又堺屋利兵衛伏
 見屋七兵衛方ニ而身賣いたし候者とも之親井請人呼出相尋候處何れも下女奉公之相對ニ而奉公ニ差遣候旨
 申之候書」堀江茶屋年行司御池通四丁目河内屋庄兵衛當亥五拾五歲小堀江壹丁目龜甲屋喜兵衛當亥四拾

五歳」御池通壹丁目塗師屋次郎左衛門當亥五十四歳」黃紙御下ヶ札寫(朱書)「此者共堺屋喜兵衛方ニ茶立女定之外多ク差置候を不相糺不埒ニ付過料可申付哉(朱書)」右茶屋年行司共富嶋貳丁目堺屋喜兵衛方ニ茶立女定之外多抱致渡世候を不相糺其儘ニ差置候段不埒ニ付呼出吟味仕候處茶立女之儀ハ兩人之外差置間敷數年行司共手前ノ毎度改來候處堺屋喜兵衛方ニ茶立女定之外多差置候儀を是迄不存改疎ニいたし置候段不念之儀無申披旨申之候」右之者共儀富嶋貳丁目淡路屋九左衛門悴喜助被切殺候一件吟味ノ事顯候者共ニ御座候殺害人一件段ニ吟味仕候處一件之内欠落仕候ものも有之ニ付手當仕尋申付未吟味相詰リ不申候右隱賣女一件ニ而富嶋貳町目一町ニ預ケ之者多ク有之事ニ候得は殺害人一件ニかゝわらざる者共ハ下ヶ札之通御仕置申渡所預ケ等差免可申哉輕罪之者御仕置是迄相伺申付候儀は無御座候得共殺害人一件吟味ノ事顯候事故片付之儀奉窺候以上」亥六月」掛リ佐々美濃守松浦河内守」酒井雅樂頭殿御付ヶ札寫(朱書)」書面之通可被申付候(朱書)

第三十四判決例

〔吟味御用落着書〕二收録)

同○寛延三年十月廿七日落着」相使八田伴右衛門」御池通二丁目熊野屋九郎兵衛借屋和泉屋由兵衛養子娘わさ儀前方向町河内屋清左衛門家守河内屋庄兵衛支配之借家和泉屋幸介方ニ居候節わさ井幸助代判父次兵衛兩人わさ亡祖父召仕候手代南久太郎町二丁目ます屋傳兵衛相手取合力之儀願出及吟味候處わさ儀者傳兵衛方へ引取身分立行候様ニ取斗無申分出入下ニ而相濟候旨其節双方ノ口上書差出に付聞届候然ル所其以後わ

さ儀由兵衛養子ニ成リ候上、次兵衛方へ參り其身得心ニ而身賣奉公致シ居候得共、近比者病身ニ相成リ難儀致し候旨當四月七日訴出依之一件呼出シ、遂吟味候處元來次兵衛儀者わさ亡父召仕候下人ニ而わさ者主筋之ものニ候處工を以引込置其上無株ニ而茶屋致し剩わさニ身賣爲致徳用を貪取候仕形重々不届至極ニ付、次兵衛儀者今廿七日町中引廻し死罪申付、殘ル者共落着申渡覺「在牢御池通貳丁目熊野屋九郎兵衛かし屋和泉屋由兵衛」其方儀立賣堀南裏町坂本屋半兵衛世話を以テわさを養子ニ貫候上わさ任望次兵衛方へ遣置候處わさニ身賣爲致候由風聞承り異見を加候得共わさ次兵衛得心之上之儀ニ候間、構間鋪旨ニ而不取散に付其通ニ致し置候由申之其段無相違相聞候得とも最初わさを養子ニ貫候節、遊女奉公者勿論茶屋等之勤一切爲致間敷旨半兵衛方へ證文も乍渡一通之異見迄ニ而身賣致シ候をも不指留段不届ニ付、諸色無構大坂三郷拂申付候「所預ケ和泉屋由兵衛養子娘わさ」其方儀升屋傳兵衛主筋之者故先達而及出訴ニ候節、身分立行候様ニ取計傳兵衛方ニ而養育致し候上其事親類南久太郎町三丁目一向宗淨源寺母子へ引渡候處其志をも致忘却傳兵衛ハ勿論淨源寺母子并世話人坂本屋半兵衛杯之異見を不相用内々ニ治兵衛と申合置由兵衛養子ニ成り候而治兵衛方へ參り居其身得心ニ而御法度之隱賣女勤候段重々不埒之仕形ニ付、三ヶ年之間傾城町へ指遣候條其旨可相心得候「立賣堀南裏町丁宇屋治右衛門かし屋坂本屋半兵衛」其方儀淨源寺母子并ます屋傳兵衛とハ兼而懇意ニ致し候ニ付右三人之者へ及相談ニ候上わさ任望ニいつ見屋由兵衛方へ養子ニ遣申養父より證文等迄取置候儀ニ者候得共わさ養子ニ遣候以後由兵衛方ニ居馴居候哉之儀見届ニも不罷越段者不念之至候併徳用ニ抱り

世話致候事とハ不相聞ニ付令用捨候條向後可入念候」南久太郎町三丁目一向宗淨源寺并母榮壽」其方共儀
ます屋傳兵衛がわさを引取候上異見のため坂本屋半兵衛方へ預ケ置泉屋由兵衛方へ養子ニ遣候節も半兵衛
へ打任セ世話相頼候事ニハ候得共元來わさ身分之儀者先達而及出入一旦傳兵衛方へ引取暫養育致し候上親
類之儀故其方共へ引渡し候事ニ候得者わさ養子ニ遣候以後も由兵衛方ニ居馴染居候哉之儀尋ニも可遣處無
其儀半兵衛任セニ致し置候段不行届取斗ニ候向後右躰之儀無之様諸事可入念候且亦わさ儀者得心ニ而御法
度之隱賣女致し候段不埒ニ付三ヶ年之間傾城町へ指遣候間年季過候ハ、其方共方へ引取可申候」南久太郎
町貳丁目ます屋傳兵衛其方儀構無之候」所預ケ御池通貳丁目河内屋清兵衛家守河内屋庄兵衛其方支配之借
家いつ見屋幸助代判父治兵衛儀無株ニ而茶屋致し其上隱賣女指置候をも不存段兼而借屋内改疎成故と相聞
へ不埒ニ付爲過怠手鎖掛之其儘所へ預ケニ申付置候條五日目毎手鎖封印改ニ可罷出候」所預ケ安堂寺町五
丁目河内屋清右衛門」其方儀掛ケ屋鋪之内無株ニ而茶屋致し其上隱し賣女指置候者有之を不存諸事家守河
内屋庄兵衛任セニいたし置候段兼而家守へ之申付不行届故之儀と相聞不埒ニ付右掛ケ屋鋪之内ニ而賣女指
置候者之住居程五ヶ年分之家賃銀取上之所預ケ指免候條向後右躰之者不指置様可入念候」御池通貳丁目河
内屋清右衛門家守河内屋庄兵衛五人組播磨屋半兵衛天満屋清兵衛わた屋喜兵衛小山屋治兵衛」其方共儀組
合之内かわち屋庄兵衛支配之かし屋ニ無株ニ而茶屋致し其上隱賣女指置候者有之をも不存段畢竟組合之改
疎成ル故と相聞不埒ニ付過料五貫文取上之候條向後右躰之者不指置様諸事可入念候」御池通貳丁目年寄今

宮屋藤九郎」其方丁内死亡先年寄油屋吉右衛門役中河内屋庄兵衛支配之かし屋ニ無株ニ而茶屋致し其上隱賣女差置候者有之を不存段不埒ニ付庄兵衛五人組之者共へ者過料申付候條向後別而町儀之改諸事可入念候、右之通酒井讃岐守殿へ相伺候上落着申渡候條一件之者可令承知者也」午十月」捨札文言左ニ寫」御池通貳丁目河内屋庄兵衛支配之借屋和泉屋幸助代判親次兵衛」此もの無株にて茶屋いたし剩工を以主人の娘を引込置身賣いたさせ徳用をむさほり取たる科ニよつて町内引廻し死罪に行ふもの也

「公事方御定書」に於て、隱賣女の罪刑を規定せる條項は、その下卷第四十七條「隱賣女御仕置之事」(徳川禁聚第三)である(十三項よ)が、その中前段二つの判決例に見える罪と同種の罪様の場合(第五項と第十)を掲記するな(第一項)らば

(第一項)

享保七年
延享二年極

一 隱賣女いたし候もの

(第二項)

元文五年
延享二年極

一 踊子を抱置爲致賣女候者

身上ニ應シ過料之上百日手
鎖にて所は預隔日封印改

右 同 斷 (此三字「百方塔」本「舊幕」
府御定書」に據つて補ふ)

(第三項)

享保八年極

一 隱 賣 女

(第四項)

元文五年極

一 踊 子 共

(第六項)

享保七年

延享二年

一 家 主

延享元年極

身上ニ應シ過料之上百日手鎖隔日封印改

但家主建置候家藏有之候ハ、五ヶ年之内店賃相納させ可申候

(第七項)

享保五年極

一 五 人 組

過 料

(第八項)

同

一 名 主

重 キ 過 料

大坂奉行所刑事判決例二十七題

(第九項)

延享元年極

一地 主

但外ニ罷在候共右同斷ニ取計ひ又候賣女置候ハ、幾度も同様ニ申付明地ニハ申付間敷候

五ヶ年之内家屋敷取上地代店賃爲相納
五ヶ年過候ハ、元地主ニ可被返下

(第十項)

同

一御扶持人又ハ御用達町人拜領屋敷

右 同 斷

但右同斷

(第十一項)

延享元年極

一寺社門前町屋

右 同 斷

享保十四年極

但寺院神主ハ寺社奉行ニ而叱リ置自分ニ而致遠慮候様可申付候

(第十二項)

同

一同地借り町屋之分ハ

右 同 斷

但寺院神主等咎右同斷

所で次に、右二判決に現はれたる隠賣女處罰の内容と、此御定書の刑罰とを夫々對照比較してその異同を調べ度いと思ふのであるが、初めに寛保三年の第三十三判決例に就いて考へて見ることにしよう。

先づ、隠賣女渡世者塚屋利兵衛に對する『諸色取上ヶ百日手鎖懸ヶ所之者に預ヶ隔日封印改』なる處斷は、御定書の原則(項第一)と全然同一ではない。隠賣女をなせる家の家主高津屋幸七を『家屋敷家財取上ヶ』に處せるは、又御定書の原則(項第六)と同様ではない。尙ほ、富島二丁目の會所屋敷を沒收せる、又家主若狹屋仁兵衛の處斷亦同じである。⁽⁶⁵⁾

更に、此判決面には、隠賣女をなせる家の家守を『家財不殘取上ヶ候上百日手鎖懸ヶ所之者に預ヶ隔日封印改』の例が見えるのであるが、此種の家守處罰の原則は、御定書には見えない。所で御定書は、此點の記載を怠つたに止まるのか、或は此種の家守は處罰せざる定めであつたのか。御定書の草案に於ては、此種の家守を同様に處罰せんとして居る(「徳川禁令考」後案第三) 巻十五頁以下、二十頁のに、成案に之を脱して居る事實からして、私はこゝに、御定書にては、此種の家守は處罰しなかつたものと推考するものである。しかし、第三十三判決例に於ても、隠賣女當人に對する處罰は、御定書(第三項第二項)と全く同一であると云へるのである。

以上對照の結果、寛保三年の大坂隠賣女事件判決は、「公事方御定書」の規定に則つたものとは云へないことが

判明したのである(尤も隠賣女に關する御定書の成文の多)。只しかし乍ら、その大綱原則に至つては、先づ同一と云ふことは許るされるところと思ふものである。

次に、寛延三年の第三十四判決例に就いて比較調査して見よう。隠賣女當人わさの處罰は、御定書(第三項)と全く同じである。隠賣女をなせる家の家主河内屋清右衛門を、「賣女指置候者之住居程五ヶ年分之家賃銀取上之」と處斷せるは、御定書第九項乃至第十二項の「五ヶ年之内家屋敷取上地代店賃爲相納五ヶ年過候ハ、元地主に可被返下」なる規定と、同一規定に準據せるものと解して差支ないであらう。その五人組を過料五貫文に處せる亦、同じであらう(御定書第七項)。以上を以てする限り、此第三十四判決例は、御定書と同一制規に準據せるものと云ふことが出来るのである(本判決にて、隠賣女營業者次兵衛を引廻し死罪と處罰せるは、主人の娘勾引罪)。只しかし同判決面にては、更に家守河内屋庄兵衛を尙ほ所罰して居るのであるが、若し御定書上家守處罰は無きものとなし得るならば(段前)、此點に於て、大坂独自の制規が尙ほ存したものと考へねばならぬ。しかし今は、その規定一般としては、大坂と雖も御定書と同様であり、或る場合特に、その傳統が認められ特則が許るされたものと解して置くことにする。

- (8) 『御定書ニ有之趣相改候事ニハ無之先當分書面之通御仕置可被申付候』と奥書せる寛政五丑年二月廿八日の『隠賣女御仕置當分取計方之事』の條々中に、『一隠賣女抱主身上不殘建家共取上百日手鎖ニ而所に預隔日封印改云々』(徳川禁令考) 後集第三帙三一頁以下) 参照。

姦淫の罪

(一) 「公事方御定書」には、姦淫の罪に就いて詳細な規定が設けられて居る(下巻第四十八條「密通御仕置之事」、同第四十九條「縁談極候娘と不義致仕候もの之事」、同第五十一條「女犯之憎御」)が、私の手元の徳川中期の大坂判決例集には、姦淫罪に對する判決の見べきものがないのである(本誌八卷一號所載拙文一八一頁、一八四頁所出判決例、「古事類苑」法律部二、四九〇頁「刑事判決例集」天保三年十二月正存に對する判決等參照)。

しかし、「御仕置例類集」所收の大坂判決(二三、一二四、一三一頁)に徴する時、此方面に於ても、少くとも大坂判決の準則は、御定書の規定と同様であつたと推考し得られるのである。

(二) 徳川時代、「不義にて相對死」は又犯罪であつたのであるが、此種案件に關する大坂判決例は、今手元に存するのである。而して、それは姦淫を一元素とする犯罪であるが故に、本節に於てその判決の紹介をなし、又御定書との關係を、例の如く考へて見度いと思ふ。

第三十五判決例 (「諸御吟味落着書留」收録)

辰〇寛延元八月十七日〇吟味同十月廿九日落着「一相對死仕損一件」渡邊民部御代官所河州澁川郡荒川村之内三瀬百姓權兵衛忤傳兵衛「高津新地壹丁目丸屋半兵衛借屋吉野屋傳藏下女さく」右傳兵衛儀傳藏下女さく與相對死可致由申合候段吟味之上相違無之さく儀疵所ハ令平癒餘病ニ而相果候得者下手人之不及沙汰三日肆之上非人手下ニ申付候」さく主人傳藏幼少ニ付代母せき」右町年寄町人」さく手疵養生之内右之者共ニ

大坂奉行所刑事判決例二十七題

預ケ申付置候處疵所者平癒いたし候得共風邪を引込其上積氣急ニ指詰相果候段申出猶又吟味之上余病ニ而相果候趣無相違相聞ニ候さく存命ニ候ハ、傳兵衛同様の御仕置ニ可申付ものニ候得共令病死候上者死骸無構候條傳藏さち申合勝手次第片付可遣候」さく母さち」右さち儀娘さく手疵養生之内傳藏方に罷越俱ニ致看病遣候處さく遺言ニ傳兵衛儀一所ニ可相果與まで申合候者ニ候得者所詮さく相果傳兵衛致快氣候共恨與ハ不存候間傳兵衛を養子ニ致し吳候様ニさく申置其上諸親類等一切無之候得者旁傳兵衛を養子ニ致し末々介抱請度由ニ而傳兵衛身分無構出牢願之候得共難取上儀ニ付願不及沙汰候」口書掛リ吉田兵右衛門八田伴右衛門

第三十六判決例

〔諸吟味窺書寫〕天明五年の分收録

相對死可致旨申合女を殺候者」御仕置窺書」巳七月五日より吟味同八月廿七日落着」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」巳七月晦日」小田切土佐守」當七月五日大屋四郎兵衛御代官所攝州東成郡東高津村百姓庄右衛門畑地ニ御池通二丁目池田屋與兵衛支配借屋京屋三郎兵衛同家妹まち被突殺候旨村方之者共四郎兵衛方に訴出候付同人手代罷越見分之上申出候付尙又爲檢使佐野備後守私南組同心差遣死骸爲改候處咽喉ノ二寸五步程右に寄突疵壹ヶ所同所ノ少下左寄壹寸五步程突疵壹ヶ所同所ノ少左に寄壹寸程かすり疵壹ヶ所首筋髮生際ノ二寸五步程下三步斗突疵壹ヶ所都合四ヶ所所有之双物疵與相見まち死骸之際ニ血付候出双庖丁壹男下駄壹足有之同人口ニ紙をくはへさせ晒手拭を當後ニ而括有之候旨同心共申聞候付死

骸假片付申付置まを殺候者共無宿伊三郎與申者之由相聞候付手當仕召捕吟味仕候趣左之通御座候」巳七月九日入牢無宿伊三郎巳二十七歳」右之者吟味仕候處髮結致渡世前書ま兄三郎兵衛與者兼而心易毎々同人方に立入候ニ付當二月頃ま與密通いたし末々者夫婦可相成段致契約置候處當月四日夜途中ニ而ま出會候節同人申聞候者身分ニ不詰之儀有之宿元致欠落候間何方に成共連退夫婦ニ相成吳候様任申若氣之至不斗同意仕」右三郎兵衛に相尋候處申口符合仕伊三郎ま兼而密通之様子者一向不存罷在ま儀當月四日ま不斗罷出行衛不相知候付方々相尋居候内書面之仕儀ニ而驚入候事之由申之不埒之筋相聞不申候(朱書)」所々連歩行候得共此者無宿之身分候得者まを連退候而も致世話吳候者無之連も始終難添遂候儀ニ付一向相對死可仕旨申合同月五日夜ま同道ニ而小橋墓所を目當ニ罷越前書東高津村ニ而人通無之透を見合まニ爲致覺悟此者途中ニ而買調置致懷中居候出刃庖丁ニ而まを笑殺追續可致自害と存候内致人音候ニ付其場ニ而者難相果其儘立去所々うろたへ居候内被捕候事之由申立候得共まを突殺其身存命ニ罷在候上者片口ニ而難取用外意趣差含殺害いたし候儀ニ可有之旨察當申聞再應嚴敷吟味仕候得共會而左様之儀無之相對、申合まを突殺自害可致處人音いたし自害仕後、後悔仕候此上御仕置相願候旨申之候」右之者御仕置黃紙下ヶ札を以奉窺候以上」巳七月」小田切土佐守」此伊三郎儀伺之通下手人申付ま死骸と一所引捨可被申付候」黃紙」此伊三郎儀まと相對死可致旨申合まを突殺伊三郎存命罷在候上者下手人申付ま死骸と一所引捨可申付候哉」口書懇ッ片山數右衛門金井塚與四郎御仕置申付候儀御届申上候書付」小田切土佐守」

下手人無宿伊三郎」御池通三丁目池田屋與兵衛支配かしや京屋三郎兵衛同家妹まち」右伊三郎儀まちと相對死可致旨申合まちを突殺伊三郎者存命ニ罷在候付御仕置相窺候處下手人申付まち死骸と一所引捨可申付旨御附札を以被仰渡候付今廿七日當表仕來之通まちを殺候方角之於墓所伊三郎下手人申付候上佐野備後守私兩組同心差遣先達而假片付置候まち死骸と一所引捨申付候此段申上候以上」巳八月」小田切土佐守

相對死犯に關する「公事方御定書」の原則は、その下卷第五十條「男女申合相果候もの之事」（徳川禁令考）後案）第三卷一四二頁の條であるが、その第一項及び第二項、即ち

享保七年極

一不義にて相對死いたし候もの

死骸取捨爲弔申間敷候

但一方存命に候ハ、下手人

同

一雙方存命ニ候ハ、

三日晒
非 人 手 下

なる原則は、大坂に於ける原則でもあつたこと、右の二判例に就いて之を知ることが出来るであらう。

その第三項は、

同

一主人と下女相對死致損主人存命ニ候ハ、

非 人 手 下

所で、同種事件に關する大坂判例は、今こゝに掲示すること不可能なのであるが、しかし御定書の草案に、『一此度大坂ニ而主人と下女相果候もの之儀主人存命ニ候得共下人之身として主人に對し不届候間不及下手人非人之手下に可申付候惣而此類ハ向後右之通可申付候』〔徳川禁令考〕後聚とあるは、大坂に於ても、右御定書第三項と同一原則が行はれたことを物語るものであらう。〔第三帙一四四頁〕

殺 傷 の 罪

「公事方御定書」に於ても、殺傷その他身體侵害の罪と罰とを規定せる條項は、最も詳細なるものゝ一つと云へる。即ちその下卷第七十一條乃至七十四條、第七十六條乃至七十九條等多數の規定〔以上項數にして六十六、その他例へば同第六十四條等尙ほ傷害關係の規定存するが、以上は〕が、關係法條なのである。

此種罪案を取扱へる徳川中葉の大坂判決例にして、私の手元にあるもの可成りの數に上る。さればとて、御定書の各項に該當する判決を悉く網羅すると云ふのではない。しかし乍ら、それを以てして尙ほ、此方面に關する大坂判決と御定書との關係一般を類推考定することは出来ると思えるものである。

以下、此方面の大坂判決の代表例を紹介するであらう。

第三十七判決例 〔諸御吟味落着書留〕所收

卯〇延 八月廿四日吟味同十二月廿八日落着 一元主人之母に手疵負候儀 播磨町明石屋六兵衛借屋播磨

大坂奉行所刑事判決例二十七題

屋甚兵衛繼子幸助」安土町貳丁目升屋市兵衛借屋升屋吉兵衛母知貞」右幸助儀當八月廿三日夜知貞ニ手疵負候旨所之者訴出ニ付兩組同心指遣疵所爲改候上幸助者呼出シ入牢申付知貞者疵養生之内所に預ケ置疵平癒以後一件遂吟味候處幸助儀當八月中旬迄吉兵衛方ニ下人奉公相勤居候得共幸助儀傍輩之下女りと密通を茂いたし居候様ニ知貞每度申之覺無之儀を申掛ケ候段兼而意恨ニ存居候折節同月十五日之夜亦々無躰之儀を申出知貞叱リ候故彼是申披いたし候得共不入聞ニ付腹立之余リ同夜欠落いたし直ニ繼父甚兵衛方に參リ主人方當分之暇を貰候由申僞一宿いたし翌十六日夕伊勢致參宮同廿三日之夜當地に歸候得共繼父儀者貧鋪者故宿元ニ歸候儀茂難致所詮身分難立上者知貞を殺害可致與存詰所持之脇指を帶シ同夜吉兵衛方に罷越候處表之戸メ有之に付敵候得者下人平五郎明ヶ候ニ付脇指を抜候得者平五郎ハ直ニ表に引出吉兵衛者留守與相見に知貞儀同借屋葛籠屋甚右衛門母妙春與咄居候處妙春者表に引出知貞者内庭迄下リ掛候ニ付後ロカ切付候得共直ニ裏口に引出候ニ付幸助茂可相果與脇指にて咽をかき切候得共其内ニ近所之者寄り集リ捕候故仕損シ不相果由幸助身分難立迎主人に對し右之仕形無申披誤候旨申之知貞儀茂手疵請ヶ候様子者幸助申口同事ニ付右之趣阿部伊勢守殿に相窺候上幸助儀者大坂三郷引廻し於焉田礫ニ申付知貞者無構預ヶ指免候事」口書掛リ牧野平左衛門金井塚園之亟

第三十八判決例

(「諸御吟味落着書留」所收)

已〇寛延二四月九日入牢同十一月六日片付」一主人之娘ニ手疵負セ候一件」山崎町深江屋貞壽借屋和泉屋久兵

衛下人伊兵衛「右久兵衛娘とめ」右伊兵衛儀松原町今津屋七兵衛借屋奈良屋平兵衛同家妙善悻ニ而六年以前子年々拾年切右平兵衛請人ニ頼久兵衛方に奉公ニ出當二月頃々氣分致逆上心底不取メ様ニ覺當三月五日夜久兵衛者致他行久兵衛女房つま井娘とめ一所ニ臥居候側ニ而不斗自害可致與存出に庖丁ヲ持燈を消シ候得共とめ目を覺し母諸共起出候ニ付直ニ自害致し候得共仕損候由右之節持居候庖丁とめに當リ疵付候段跡ニ而承驚入候由申ニ付致自害候所存斗ニ而兩人臥居候所に可參様無之全とめに對シ兼而意恨(原根は誤)在之故久兵衛留守を考可致殺害與存候事ニ可在之旨再應遂吟味候慮意恨有之可致殺害與工候儀ニ而者無之不存斗右之仕合ニ候得共とめ手疵負イ候上者無申披旨申之ニ付主人申口をも再應相尋候處兼而氣むらニ候由伊兵衛申口に令符合とめ疵所義少し斗之儀ニ候得者全く可致殺害與工筋ニも不相聞候併自害可致存念ニ而寢間に這入怪我ニも主人之娘に手疵負せ候段者不届ニ付死罪申付候事」口書掛リ磯矢市左衛門田中武兵衛

右二判決例は、元主人の母傷害と主人の娘傷害とを取扱へるものであるが、今御定書上の關係條項を出して見ると、その下巻第七十一條『人殺并疵附等御仕置之事』(徳川禁令考後案第三帙六五五頁)の條の第五項と第十二項、即ち

同寛保元年極

一同古爲手負候もの

從前々之例

一同主人の親類爲手負候もの

引廻之上

磔

引廻之上

死

罪

扱て、右の大坂判決に於ける處斷内容は、此御定書の原則と、殆んど合致するものと云ふことが出来るであらう。尙ほ、御定書下卷同上條の第十四項は、

従前々之例

一親 殺

引廻之上
礎

であるが、大坂にも同様の原則が行はれたこと、後出第四十四判決例に依りて、之を窺ひ知ることが出来る。

第三十九判決例 (吟味御用落着書「一所收」)

相使瀬田専右衛門「周防守殿御掛(朱書)」本天満町平野屋治兵衛下人幸助儀右治兵衛借屋了一方下女りん切

殺、其上一方悻伊三郎ニ手疵負セ候段不届ニ付阿部伊勢守殿ニ相伺候上今日下手人ニ申付一件之もの共落着

申渡覺「所預ケ了一方悻伊三郎」其方儀遂吟味候處兼而幸助ノ意趣受候覺曾而無之旨申之幸助義も其方儀

不存うろたへ手疵負ハ候由申之其段無相違相聞ルニ付無權所預ケ差免候「所預ケ了一方下人傳八」其方儀

主人一方ノ平日借リ置候脇差ニ而幸介義りんを致殺害伊三郎ニも手疵負セ候ニ付遂吟味候處右脇差之身ニ

び在之不及研賃ニ研セ可遣由幸助申立ニ付何之無思慮遣候旨申候得共主人に無斷容易ニ渡遣候段不埒ニ

付咎をも可申付處吟味之上切害之筋ニ携候義トハ不相聞ニ付無權所預差免候條向後右躰之不念無之様可相

慎候「幸介主人平野屋次兵衛」同女房さや「りん主人了一方」同女房ふさ「同悻三之助」(以下關係者即ち親類等列舉、無構)

右之通申渡候條一件并家主年寄丁人可令承知者也「延享四(朱書)」卯八月廿六日

第四十判決例

〔諸御吟味落着書留〕所收〕

已○寬十一月廿一日夕吟味翌午正月片付「一殺害いたし候一件」茨木町堺屋喜兵衛下人九兵衛「同斷作兵衛」右九兵衛儀去ル已十一月廿日夜剃刀を以傍輩之下女さつを殺害致し其上作兵衛ニ手疵負せ候旨所之者訴出ニ付兩組同心共檢使ニ指遣疵所爲致見分候上九兵衛儀入牢申付作兵衛義者所に預ケ疵養生申付置候處此節疵所令平癒候由猶又訴出候間一件遂吟味候處九兵衛儀さつを女房ニ致度存兼而不儀申掛ケ候得共得心不致右之様子傍輩ニ洩聞候哉十一月十九日作兵衛并傍輩之下男共打寄九兵衛ニ申聞候者右躰之不儀ケ間鋪儀有之候而者傍輩共互ニ申分出來若主人に相聞候而茂如何ニ候間向後相愼候様ニと令異見候ニ付尤與存心底相改候處翌廿日さつ儀主人居室之内庭ニ而作兵衛與竊咄致し候躰及見候故九兵衛ニ者致異見置右之仕形全不儀ニ可有之與令推量腹立之餘リ同夜さつ臥リ居候所に這入剃刀を以殺害致し其上ニ而作兵衛臥リ居候所に茂參手疵負せ候處聲立候ニ付同間ニ罷在候下男共起合指留候由九兵衛さつ不儀之様子實否茂不糺忽之仕方吟味之上無申披誤候旨申之作兵衛儀茂九兵衛ニ異見を加に候段ニ之様子右申口同事ニ而九兵衛義傍輩共異見を相用候段さつに竊咄候迄ニ而作兵衛がさつに不義ケ間鋪儀申掛ケ候事に者毛頭無之勿論作兵衛義九兵衛與者常ニ致中能意趣等請候心當リ一切無之處不存寄手疵を負令迷惑候併疵所茂令平癒候上者九兵衛に對シ申分無之旨申候右之通九兵衛義作兵衛さつ不儀之様子疑迄ニ而實否茂不相糺忽之仕形不届至極ニ付九兵衛義ハ下手人ニ申付作兵衛儀者無構旨申渡候事一口書掛リ八田五郎左衛門桑原勝之丞

右二判例は、前掲御定書下卷第七十一條第二十五項

従前々之例

一人を殺候もの

下 手 人

が又、大坂の原則でもあつたことを實證するのである。

「公事方御定書」下卷第七十七條『酒狂人御仕置之事』〔徳川禁令考〕後の條の第一項及び第二項

享保十六年極

一 酒狂にて人を殺候もの

下 手 人

但被殺候もの之主人并親類等下手人御免願申出候共取上聞敷事

享保七年極

一 酒狂にて人に爲手負候もの

疵被附候もの平愈次第療治代爲出可申候〔但書略〕

は又、大坂にても行はれたる原則であること、次掲の判決例に徴して之を知ることが出来る。只第四十三判決例は少しくその趣を異にし、御定書の原則と異なる判決内容と見受けられるが、御定書同上條第五項など、對比する時、敢へて大坂独自の判決とも云へない様である。

第四十一判決例 〔諸御吟味落着書留〕所收〕

卯○延 六月十日夕吟味同八月廿六日落着 一 酒狂、而致切害候儀 相生東之町一向宗徳龍寺住持慶言 并 享四

女房れん」同下女しけ」同町麥屋九兵衛」同家母妙意」相生西之町松屋幸助かし屋河内屋七郎兵衛忰利右衛門」天滿攝津國町北國屋又右衛門同家九兵衛方ニ雇女がん」右慶言儀當六月十日暮時召任下人武助并隣家麥屋九兵衛下人儀兵衛兩人を切殺九兵衛母妙意同人方に雇女がん河内屋七郎兵衛忰利右衛門右三人ニ手負(願負重 出は誤)致自害候得共不相果旨町人共訴出ニ付爲檢使兩同心指遣五人之者共疵所爲相改候上武助儀兵衛死骸者其節片付申渡妙意がん利右衛門者所預ケ疵養生申付慶言儀者揚リ屋ニ入置手負人共疵所平癒之上一件逐吟味候處慶言儀六月十日攝州東生郡野田村大黒屋三郎兵衛方ニ而酒給候處醉強暮比宿元ニ歸候迄者覺候得」三郎兵衛呼出相尋候處酒ニ給醉候躰ニ候得共近所之事故暮比罷歸候其後之儀曾而不存旨申之候(朱)右之者共切殺并手疵負候儀ニ一切不覺由申中ニ付九兵衛始其外之者に對シ兼而意恨有之可切殺存念ニ而右之仕儀ニ可有之段逐吟味候處九兵衛者隣家故別而懇意ニ而是迄申分等致し候儀茂無之其外之者に茂意恨合候儀毛頭無之候得共酒亂之上本心を失ひ右之任合無申披令後悔候旨申之慶言女房れん申候者慶言儀大黒屋三郎兵衛方ニ酒ニ給醉罷歸候上家内之者を可切殺旨聲高ニ申刀を取ニ參候故驚同町年寄茶屋仁兵衛方に逃退跡之様子曾而不存候慶言儀常ニ短慮ニ而酒給候得者言葉荒ニ相成家内之者抔叱候儀度ニ有之候得共夫好合惡敷儀曾而無之旨申之麥屋九兵衛母妙意申候者暮時分臺所揚リ口ニ居候得者慶言儀後ニ右之肩先に切付候ニ付直ニ倒漸翌日正氣ニ相成候由慶言義隣家故致心易意恨請候覺無之旨申之がん義茂九兵衛方に被雇居候所暮時分後ニ左之耳下切付候ニ付其儘倒前後不覺勿論慶言ノ意恨請候覺茂無之旨申之河内屋七郎兵衛忰

利右衛門儀毛綿商賣致し商イノ歸見世をノ居候處何者ニ候哉利右衛門左之肩之上切付切先腹に當候ニ付其儘内に逃込候處追かけ這入候ニ付毛綿荷之後に隠候得者見失ひ候哉裏走リ出候故利右衛門儀者町内會所借屋魚屋半右衛門方に逃退候由慶言儀隣町故顔者見知り居候得共近付ニ而茂無之尤意恨請候覺會而無之由申之麥屋九兵衛中候ハ病氣ニ而居宅奥之間ニ臥居候處臺所さわかしく候故起出候處慶言儀拔身持參リ切掛ケ候ニ付家内之者ニ怪我抔有之候而者如何與存意恨有之者表に出候様ニ申聞表に出候得者慶言も引續罷出候處九兵衛を見失候哉慶言儀相生西之町路次に這入候ニ付九兵衛者裏口ノ宿元に立歸候處下人儀兵衛被切殺ハミ妙意雇女が hands 疵負倒居候ニ付早速年寄町人に相知せ候由慶言儀兼而致心易意恨請候覺會而無之由申之ニ付右之趣阿倍伊勢守殿に相窺候上慶言儀他之下人迄致切殺其外之者ニも手疵負候段出家ニ不似合仕形不届ニ付一統重ク御仕置可申付儀ニ候得共本心を失ひ候事ニ付下手人ニ申付候麥屋九兵衛儀家内ニ手負人等有之を不存表に出立歸候上見付候由町人トハ申ながら油斷之至ニ候以來可相慎旨申渡妙意がん利兵衛右三人者無稱旨申渡所預指免候夏」口書掛リ工藤七郎左衛門小泉伊左衛門

第四十二判決例

〔諸御吟味落着書留〕收録)

已〇寛二 五月七日ノ吟味同八月十三日落着」一口論之上突疵負せ候一件」玉澤町大黒屋吉右衛門下人兵助」同斷清七」同町虎屋權兵衛借屋石灰屋四郎兵衛同家悴庄兵衛」右庄兵衛儀當五月六日籠屋町中仕長兵衛方に參酒給候上罷歸候途中ニ而兵助ニ出合理不盡に腕を取候故咎候得者兵助召連主人吉右衛門方に罷越彼是

重高を申ニ付清七罷出及挨拶候處此儀を令腹立候哉其場ニ有合候火箸以清七を突候由兵助清七兩人之者申之ニ付遂吟味候處兩人共兼而近付ニ而茂無之意趣等可指合様無之全酒狂ニ而前後不覺右之仕方令後悔候旨庄兵衛申之清七儀疵所致平癒候上者此後庄兵衛に對シ少茂無申分旨兵助清七猶又申立候然其庄兵衛儀酒狂ニハ乍申右兩人に對シ法外之仕方不埒至極に付急度咎を茂可申付處清七疵所茂致平癒以後庄兵衛に對シ無申分旨兩人之者申に付此度者令用捨出牢申付候間清七疵所爲養生料鳥目三貫文庄兵衛方が相渡自今右躰之儀可相愼旨申渡尤兵助清七儀茂無構所預ケ指免候事一口書掛リ由比甚右衛門淺羽久米右衛門

第四十三判決例

〔諸御吟味落着書留〕收録〕

卯○延 十月十三日夕吟味同十一月六日落着「一酒狂ニ而手疵負候儀」宿なし有平」石原清左衛門御代官所河州茨田郡門眞貳番村百姓久右衛門伴藤助」右有平儀當十月十三日夜攝州會根崎村ニ而藤助ニ手疵負候旨右村方之者の訴出ニ付爲檢使兩組同心指遣疵所爲改候上有平者入牢藤助者居村之者に預ケニ申付養生爲致置疵平癒以後一件遂吟味候處有平儀秋元但馬守殿當地藏屋敷ニ中間奉公勤居候ニ付當九月八日期平近付會根崎新地壹丁目中島屋藤助方ニ而傘を借リ候ニ付返し可申と存十月十三日夜持參候處酒さし候故給候上無程罷歸候於途中ニ往來之者有平に行當候ニ付追繼候様覺候得共酒之醉前後不存醉覺メ候上指居候脇指之鞘われ有之を見届若鞘共ニ敲候故藤助に疵付ケ候事ニ茂可有之哉與心付候由有平儀藤助與者近方付ニ而茂無之候得ハ意趣可合様無之酒狂ニ而右之仕方令後悔候旨申之藤助申候者其夜用事有之會根崎邊に罷趣候途中

ニ而往來之者與行違候節持居候手掛落子候ニ付取上ケ可申與存居候内何者ニ候哉後ロ切付ケ候故曾根崎村百姓家に逃込候様ニ者覺候得共氣絶致候故其後之様子不覺疵所茂致平癒候上者外に對シ申分無之旨申之ニ付右之趣阿部伊勢守殿に相親候上有平ハ大坂三郷拂申付藤助者無構預ケ指免候事」口書掛リ丹羽源十郎大西作左衛門

「公事方御定書」下卷第七十八條『亂氣ニ而人殺之事』(德川禁令考後集卷四)の條の第一項に、

享保六年
元文三年極

一 亂心にて人を殺候共可爲下手人候然とも亂心之證據慥ニ有之上被殺候もの之主人并親類等下手人御免之願申におゐては遂詮議可相伺事

享保六年極

但主殺親殺たりといふ共亂氣無紛ニおゐては死罪自滅いたし候ハ、死骸取捨て可申付事

と見えるが、大坂に於ても、少くとも徳川中葉時代、亂心殺人者下手人(徳川禁令考後集卷四) 帙一〇二頁以下参照、亂心親殺死罪であつた(次段第四十) (四判決例)のである。

第四十四判決例 (諸御吟味落着書留) 所收)

卯〇延 四月十二日カ吟味同八月五日落着」一亂心ニ而母を殺候儀」奥谷半四郎御代官所攝州西成郡南傳法享四 村表屋五兵衛」同人從弟善次郎」同斷庄兵衛」同斷妹津屋」同御代官所同郡佃村百姓五兵衛從弟小兵衛」

同斷北傳法村船乘 同人伯父清三郎「同村百姓 同人從弟作次郎」同人母「同人伯母ふく」右五兵衛儀同家ニ罷
在候實母を敵殺候旨半四郎方々召捕指出ニ付入牢申付遂吟味候處五兵衛儀廻船加子働渡世に致し候處近頃
者病氣ニ而働ニ茂不罷出致養生居候内當四月十一日之夜五兵衛同家弟善次郎他出致し留守に者五兵衛并
實母よし兩人斗ニ而宵之内々臥リ居何時ニ候哉不斗目覺側ニ人居候を見付ケ宵ニ母臥リ居候義を忘却致
シ手拭而首筋をメ木割候斧手元ニ有之ニ付右斧にて胸を貳ツ三ツ敵候所に一兩組同心檢使ニ指遣死骸爲改
候處斧ニ而敵候與相見ニ鼻之下敵切レ有之迄ニ而外ニ疵所無之五兵衛申口相違に付猶亦此段相尋候處首筋
を手拭にてメ胸を斧にて敵候様覺候得共是以慥ニ者不存旨申之候(朱書)「弟善次郎罷歸リ聲立候ニ付近所之
もの參合致繩卷に候までハ覺居候得共臥リ居候母とも不心付尤其節いケ様之存念に而敵殺候哉乍自分存
當リ無之旨申ニ付母と申儀不心付殺候と申者五兵衛兼而家内之者歟其外に茂意恨含居候もの有之其儀存詰
人違ニ而殺候ニ者無之哉と再應遂吟味候處兼而意恨含候者曾而無之殺候節之儀唯今至リ相考見候得共如何
いたし卒忽之儀致し候哉一向前後之儀不覺仕合母を殺候段重々後悔仕候旨五兵衛申之候且亦五兵衛親類共
并所之者申候者五兵衛儀母を殺候節ハ同家弟庄兵衛妹津屋者致他國居善次郎儀ハ親類共方に參十一日夜四
ツ時分歸候處五兵衛儀斧を持母臥居候際立居候ニ付驚聲を立候得者所之者驅ケ付ケ五兵衛フ繩卷ニ致シ候
由五兵衛儀平日母子之間者勿論其外親類共とも睦敷致し孝心者ニ候得者意恨可含存當リ毛頭無之由併五兵
衛近頃者病氣ニ而働ニも不罷出折々者氣むら之様ニ相見に不取メ事杯をも申候得共母義五兵衛を不便ガリ

氣むら之様子外に不知様ニいこし吳候得與申ニ付隨分内ニ而養生爲致候五兵衛義兼而母に致孝心ニ平日律義成ルものニ候得者全亂心ニ而殺候儀と存候旨申之其段無相違相聞ニ付右之趣阿倍伊勢守殿に相窺候上五兵衛義母を殺候段不届至極ニ付磔罪ニ茂可申付候得共全亂心ニ而殺候事ニ付死罪ニ申付其外親類共ハ無權旨申渡所預ケ指免候事一口書掛リ黒崎岡右衛門田中宇左衛門

尙ほ、「公事方御定書」下卷第七十一條第二十三項（支配名主殺害）、同第二十九項（自分の犯行を知れる者を殺害）、同第三十三項（相手不法無是非殺害、尙ほ同上第七十二條大約同じ規定）、同第四十二項（離別の妻傷害）、同第四十八項（親燒死を捨置）等は、今「御仕置例類集」所收判例（「徳川禁令考」後聚第三帙七六一、七八三、七六三、七六五、七六六の各頁以下、同上第四十二項に就いては次節掲出判例）に依つて、又大坂の原則であつたことが推知せられるのである。

又「公事方御定書」下卷第七十三條『疵被附候者外之病ニ而相果疵附候もの之事』（「徳川禁令考」後聚第四帙七頁）は、

元文三年極

一手疵負候者元より及死候疵ニ而無之處平愈之内余病差發り死候ハ、彌遂吟味を余病ニ而死候に紛無之におゐてハ相手不及下手人事

であるが、前出第三十五判決例に、『さく儀疵所ハ令平癒余病ニ而相果候得者下手人之不及沙汰』とある所から、右御定書第七十三條又大坂の制規であつたとなし得るのである。

御定書下卷第七十四條も亦、大體大坂の原則であつたらしい（「徳川禁令考」後聚第四帙三〇頁以下參照）。

以上を以てする時、「公事方御定書」上の殺傷等に關する罪刑法一般は、大坂の制規でもあつたと推定して、大なる誤を犯すものではないと云ひ得るであらう。

婚姻妨害の罪

第四十五判決例〔諸御用御窺書〕寶曆四戌年乃至十辰年の分收録〕

寶曆九卯年十月(朱書)「口書掛リ八田五郎左衛門羽津次兵衛(朱書)」口論之上打擲仕候一件「御仕置窺書」岡部對馬守「當時宿なし元助儀天滿攝津國町植木屋庄兵衛借屋油屋平七與當九月二日之夜及口論疵請候而奧津能登守組與力勝部丈右衛門門内に駈込候處丈右衛門召仕之者咎メ候得は右之様子申聞候ニ付丈右衛門も罷出先元助ハ長屋に入置醫者等呼寄せ爲致療治置候旨能登守方に丈右衛門申出テ候由能登守ハ申越候ニ付爲檢使兩組同心共差遣候上右ニ携候もの共引寄せ入牢所預ケ等申付一件吟味仕候趣右之通ニ御座候」卯九月三日小屋預ケ同十月廿日入牢宿なし元助卯三拾八歳「黃紙」此者當時無宿ニ而可立寄方無之候ニ付京屋ハよ同家ニ相成身分之儀ちよに請合吳候様ニ平七不得心之義を再應申募リ其上口論之節出双庖丁取出し尤其節藤兵衛もき取候ニ付平七に疵ハ付不申候得共庖丁相用ひ候商賣先ニ而之儀與申ニ而ハ無之候得は庖丁之儀口論之用意ニ所持不致との申分難立候且又先達而事濟候儀ニハ候得共離縁いたし平七妻ニ成居候しけ儀ニ付平七に度々口論致シ掛ケ合力請剝離縁之妻を理不盡ニ連退キ打擲等いたし候仕方旁不届ニ付中追放可

申付哉」右元助儀前方武士方ニ中間奉公相勤居候節傍輩之下女天滿今井町鮫屋六三郎借屋京屋徳兵衛娘し
 け與末ニ夫婦可相成與致契約其後武士方奉公相退キしけ町方ニ下女奉公相勤元助儀ハ日雇働等仕罷在候得
 共身貧ニ付相對之上當六月四日離縁仕暇狀差遣候處しけ義油屋平七女房ニ相成候由及承平七八兼而心易い
 たし候段一應ハ噂も可仕事與存平七ニ其段申候得は暇狀有之候ニ付平七女房ニ候旨申之暇遣候上ハ強而可
 相爭様無之候得共身貧ニ而難儀仕候故無心申懸ケ候得は平七ノ鳥目四貫文合力仕候ニ付鳥目請取罷歸リ候
 然共しけを實ニ離縁いたし候心底ニ無之候故しけ得心仕候ハ、再女房ニ致度當七月下旬平七方に罷越平七
 留守之内しけを連萩原藤七郎御代官所攝州西成郡下福嶋村上元屋九右衛門借屋京屋ちよ方を相頼元助し
 け兩人共暫居候内」右ちよ呼出シ様子相尋候處元助しけ兩人共兼而近付キニ御座候處暫之内ちよ方ニ差置
 吳候様ニ相頼候ニ付無何心止宿仕らせ候得共永ニ差置候儀ハ難成旨斷を申兩人共差^レ候由申之其段無相
 違相聞申候^書」しけ儀ハ^書去リ候段不埒ニ存同八月上旬又ニ平七方に罷越しけ呼出シ致打擲候處元助儀
 右ちよ方ニ居候趣ニ申成シしけ身分相妨難儀之旨同月十九日萩原藤七郎御役所にしけ願出元助を呼出シ候
 得共其節ちよ方ニハ居合不申勿論村方人別ニ加リ候ものニも無之に付元助見逢次第相願候様ニ藤七郎申渡
 候趣及承候由然ル處同月廿一日之夜於途中元助儀平七ニ出會しけ身分之義申出及口論候處同御代官同州同
 郡川崎村吹田屋七兵衛借屋播磨屋新六挨拶仕双方申宥メしけ儀暇遣候上ハ一切差構無之段しけ宛之證文元
 助ノ遺シ事濟候得共元助貧窮を見兼平七ノ銀六拾目差出新六方に請取元助に合力いたし吳候ニ付」新六呼

出シ右之様子相尋候處元助申口符合仕候^(朱)一兩人にも一札申候得共差當リ可立寄方無之ニ付右ちよを頼當分同家も致度候間元助身分請合吳候様ニ平七に相頼候得共聞入不申候ニ付不埒ニ存罷在候折節同九月二日之夜五ツ時分途中ニ而酒調給川崎村新家髮結床に參候得は平七儀被雇相働居候ニ付右之儀又、申出聲高ニ相成候處此所ニ而は人立有之間平七宅に可參與申之同道ニ而罷歸候途中天滿東寺町大鏡寺前ニ而口論相募リ摺合候内平七儀元助天窓を強ク擲キ候^(中)元助儀此節疵所も致平癒候上ハ平七者勿論一件ニ携候者共ニ對シ申分無之由申之^(中)平七不得心之儀を再應申掛ケ及口論出双庖丁を振上ケ候處宿なし錢屋藤兵衛も^(中)取候^(略)其節元助儀強ク酒ニ給酔罷在候得は指居候庖丁を無何心振リ上ケ候儀と存候由酒狂ニ而卒忽之仕方其上平七不得心之義を再應申募リ及口論候段重、無申披誤入候旨申之候一卯九月三日入牢天滿攝津國町植木屋庄兵衛借屋油屋平七卯廿七歳「黃紙」此者儀元助離縁之女房しけを妻ニ致候義ニ付不埒之筋不相聞是迄元助義度、口論等仕懸ケ不埒之仕方有之を其分ニいたし置却而元助儀身貧之者故度、合力をも致候程之心底ニ候得は此度之口論之節元助に疵付ケ候儀無餘儀事ニ相聞殊此度迎も元助々仕懸ケ候口論之義其上元助疵所讒之儀ニ而此節致平癒候ニ付無構出牢可申付哉一右平七^(中)是迄致了簡居候得共元助儀出双庖丁を振リ上ケ候故不得止事草履下駄を以致打擲候段卒忽之至無申披誤入候由元助疵所も致平癒平七義も痛所全快仕候ニ付以來元助に對シ申分無之旨申之候^(中)右之者共御仕置黃紙下ケ札を以奉伺候以上一卯十月一岡部對馬守一御城代御附札一元助平七藤兵衛しけ伺之通可被申付候^(朱)

本判決に依つて、當時大坂にても、『離縁之妻(現在他に再婚の)を理不盡ニ連退キ打擲等いたし候仕方旁不届』であつたことが知られるのである。しかし此判決は、その新夫に對する打擲事件の裁斷であり、此打擲行爲を中心とし、併せて離縁の妻に對する右の如き行爲を斟酌して、中追放と判決を下せるものと解せられるので、此判決面のみにては、右の如き先夫の他に婚嫁せる先婦に對する行爲丈ならば、如何に罰せられたか、その點不分明なのである。

一方、「公事方御定書」下卷第九十條『不縁之妻を理不盡に奪取候もの御仕置之事』(徳川禁令考(後案)の條に、第四帙二六六頁)

寛保四年極

一 婿養子不孝不埒有之差戻候以後外之養子いたし娘に嫁合候節

先夫荷擔人を催參娘を奪取候におゐてハ

但人ニも疵付不申其上養父方之者共詫候ハ、當人重キ追放

當人 罪
荷擔人之内
頭取 所
田畑家財取上 拂
其 過 料

と見えるは、此第四十五判決例と略々同様の事案に對する原則であるが、しかし御定書のそれは、『荷擔人を催參』點に於て、判決事案と異なる所があるのである。

従つて、此種の先夫先婦事件に關する、大坂支配の原則と、御定書上の規定との異同如何を、今精密に検討することは出來ないのである。しかし大坂の原則にても、御定書上にても、此種の犯行を不法となせることは充分明

白なのであるが故に、少くともその根本主義に於ては、兩者同一と云ふことは出来るであらう。

尙ほ此種の犯行は、監禁行爲でもある譯で、こゝに不法監禁亦當時に於ても、犯罪であつたことを知らしめるのである(拙文、「判例近世大坂私法一斑」(中田先生)「還曆祝賀法制史論集」所收「第二判決例参照」)。

(二) 前段は、成立せる婚姻を妨害せる罪に就いての記述であるが、婚姻の成立を妨害する行爲も亦、少くとも大坂に於ては、處罰せられたこと、次掲の判例に就いて之を知ることが出来る。

第四十六判決例 (「諸吟味窺書」天明六年の分收録)

盜賊并離縁之女房所持之品取歸候もの又ハ盜物引受候者ハ組合定有之商物を組合ニ不入賣買いたし候もの「御仕置窺書」(中略)「右之者共御仕置黄紙下ケ札を以奉窺候以上」午十二月「小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札「(中略)此藤兵衛儀伺之通入墨之上遠國非人手下可被申付候」黄紙「此藤兵衛儀離縁之女房に執心相殘シ再縁を妨殊同人を引寄せ候方便ニ候逆武兵衛方手元ニ有之ちよ所持之品を理不盡ニ取歸彌七方ニ而も無躰を申懸ケ不立去罷在候段旁不届ニ付入墨之上遠國非人手下可申付候哉」(中略)「此もん儀伺之通三十日手鎖申付」(中略)「黄紙」此もん儀所々町家見世先ニ有之候品盜取候段不届ニ付敲可申付候哉之段可相窺候處女之儀ニ付三十日手鎖可申付候哉」(下略)

『狼籍』の罪

第四十七判決例 (諸御吟味落着書留)所收)

寅^延三十一月十八日吟味同日落着「一酒ニ給醉倒居候儀」當時宿なし關谷久七」右久七儀奥谷半四郎御代官所攝州西成郡上福嶋村領之内梅田橋西詰ニ酒ニ醉候躰ニ而倒居候ニ付所之者出會候處刀を抜候ニ付繩卷ニ致置候併手疵等請候者無之旨所之者訴出ニ付兩組同心指遣爲召連歸候上遂吟味候處久七儀阿部伊勢守殿家中新居頼母家來ニ候處昨十七日之夜主人手前拔ケ出會根崎新地顔見せ^テ居見物ニ罷趣酒ニ給醉右場所ニ倒居醉覺メ候上其邊ヲ見候處指居候刀之身拔ケ有之驚候由酒ニ給醉前後不覺右之仕合令悔候旨申之全酒狂ニ無相違相聞ニ付急度叱之上門前拂申付候事」但伊勢守殿久七欠落斷有之候事」口書掛リ八田五郎左衛門大西作左衛門

「公事方御定書」上の、同様の事案に關する規定を擧ぐるならば、その下卷第七十六條『あばれもの御仕置之事』(徳川禁令考^後 第四帙四九頁)の條の第二項(但書)從前々之例

一 あばれ候而町所をさわかし候もの

敲之上
所 拂

が適例である。⁽⁹⁾しかし判決面の犯行が、酒狂狼籍である點に於て、從つてその刑罰が、兩者相似たりと云へども、全然同一でない⁽⁹⁾と云ふ點に於て、兩者を對照して御定書の原則がそのまゝ大坂の原則なりしや否やを決することは、勿論妥當ではないが、後の判決例(徳川禁令考^後 第四帙五四頁所收)などから類推して、此方面に關しても、御定書の原則又、

大坂の原則なりとなして差支ないと考へる。

「公事方御定書」下巻第七十五條『婚禮之節石を打候もの御仕置之事』〔徳川禁令考〕後（案第四帙四三頁）の條

延享元年極

一 婚禮之砌石を打狼籍（原しは誤、同上）たし候もの

頭 取
百 日 手 鎖
同 類
五 十 日 手 鎖

又狼籍犯の規定であるが、大坂に於ても此種の所爲を不法としたこと、事實上此種の犯罪が行はれたこと丈は、次掲の史料に依つても、之を窺ひ知ることが出来るのである。即ち「盜賊吟味役日記」（寶曆十三癸未歲正月の分）に、『二月廿三日』（中略）一去年十二月三日夜京町堀三丁目伊丹屋又兵衛借屋大和屋平兵衛悴平八女房呼迎候節石打候者三人町廻り役人召捕差出ニ付所預ケ被仰付置候ニ付右三人口書并年寄町人口上書取之出雲守殿へ入御覽候處平兵衛表之戸損所も纒斗之儀ニ而吟味も不相願其上三人とも酒ニ給醉若氣ニ而無思慮仕方と相聞先三人とも急度叱り所預ケ差免年寄町人共も叱り遣候迄ニ而可相濟哉併石打仕間敷之儀は兼而御觸渡も有之事ニ候へ者御城代に御伺被成候方も可有之哉此儀能登守殿に被及御相談ニ候間此旨可申上旨被仰渡候ニ付右口上書等孝之助へ相渡シ右之趣可然被申上能登守殿思召寄承り被申聞様ニと申談候事』。

所で、此方面に就いても、今實證の手段はないが、大坂方の原則又、御定書のそれと同様であつたのではあるまいか。

(9) 『狼籍』と『あばれ』、御定書上は同義に用ふ。(『徳川禁令考』後案第四帙四九頁以下六十頁以下参照)。御定書下巻第七十六條第二項の『一あばれ候而』の而原脱、今「徳川禁令考」後案第四帙五一頁に據りて補ふ。百万塔本「舊幕府御定書」は『一あばれ候て』に作る。

詐 偽 の 罪

第四十八判決例 (諸吟味窺書寫) 天明五年の分收録)

かたり事并怪敷品と乍心付引受賣捌遣又ハ預リ置候もの土藏に忍入候盜賊ニ被頼盜物持運配分取其外盜物引受或ハ盗いたし宮方御用印之提灯拵させ帶刀ニ而致徘徊候一件」御仕置窺書」(中)「右之者共御仕置黄紙下ケ札を以奉窺候以上」巳三月「小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札」此道益儀伺之通入墨之輕追放申付過料償等之儀者朱書之通可被申付候」黄紙」此道益儀土藏に忍入候盜賊ニ被頼盜物持運質入亦ハ賣拂遣代銀配分を取其外ニも盜物引受賣拂遣無宿次兵衛と申合百姓家入口軒下等之品盜取其上かたり事ハ不致與ハ乍申無謂宿方御用印之提灯を拵させ所持いたし帶刀ニ而致徘徊候段旁不届ニ付入墨之上輕追放可申付候哉」此次右衛門儀伺之通過料三貫文可被申付候」同○黄紙」此次右衛門儀宮方御用印之提灯道益ガ詭候ハ、同人身柄等承糺候上拵遣可申處無其儀不念に付過料三貫文可申付候哉」此源助儀伺之通諸色取上ケ輕追放申付償損失等之儀ハ朱書之通可被申付候」同○黄紙」此源助儀古手仲間定法相背キ清兵衛ガ賣拂之

儀相頼候品ハ盜物にも可有之哉と怪敷乍心付引受賣捌遣又ハ右品預リ置賣代錢之内も世話料ニ貫請候段不届に付諸色取上輕追放可申付候哉」此庄吉儀伺之通入墨敲可被申付候」同○黄此庄吉儀所々寺社家にて語事いたし候段不届ニ付入墨敲可申付候哉

第四十九判決例

(「諸吟味窺書寫」天明七年の分收録)

未二月朔日下同月六日落着」虚談を以銀子借請候者」御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」未二月六日」小田切土佐守」去年九月十一日入牢天満空心町大和屋伊右衛門借屋藥屋吉三郎同家吉兵衛未五拾歳」右之者御仕置黄紙下ヶ札を以奉窺候以上」未正月」小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札」此吉兵衛儀伺之通入墨敲可被申付候」此吉兵衛儀佐兵衛與見合熊膽買請候躰ニ見世かけ虚談を以下直之品を高直之品之様ニ申偽引當ニ相渡無縁之者ハ銀子借請候始末かたり事同前之儀不届ニ付入墨敲可申付候哉

以上の二判決を通して、『かたり事』即ち詐偽取財犯處罰に關する、徳川中葉時代の、大坂地方の法則を窺ひ知られるのであるが、之は、「公事方御定書」下卷第六十四條『巧事かたり事重キねたり事いたし候もの

御仕置之事』(「徳川禁令考」後纂)第一項但書

延享二年極

但當座之かたりハ手元ニ有之品を盜取もの御仕置

○金子ハ拾兩より以上雜物ハ代金ニ積拾兩位より以上ハ死罪
金子ハ拾兩より以下雜物ハ代金ニ積拾兩位より以下ハ入墨敲

大坂奉行所刑事判決例二十七題

〔徳川禁令考〕後
聚第三帙三〇三頁

なる原則と同一であつたのである。

御定書同上條第二項本文に、

寛保二十年極

一 巧成儀申掛度々金子等かたり候もの

金高雜物之不依多少

獄

門

なる法規があるが、之又大坂の原則でもあつたこと、次掲の判決例に依つて之を知ることが出来るのである。

第五十判決例 〔諸吟味窺書寫〕天明五年の分收録

金銀掠取候一件「御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候「巳十一月四日」小田切土佐守「巳四月二日入牢同八月七日牢死吉原町佐野屋源兵衛借家池田屋利兵衛」所預ケ順慶町貳丁目河内屋清次郎「巳廿貳歳」右之者共御仕置黄紙下札を以奉窺候以上「巳八月」小田切土佐守「御城代阿部能登守殿御附札」此利兵衛儀伺之通存命候ハ、獄門可申付者ニ候段一件之者に可被申渡候「黄紙」此利兵衛儀、遠國之者共銀子借受度旨申込候を幸ひニ市郎兵衛申合口入いたし候躰ニ而巧成儀を申懸度々金銀掠取候段不届至極ニ付存命ニ候ハ、獄門可申付ものニ候段一件之もの共に可申渡候哉「此清次郎儀伺之通過料五貫文可被申付候」同○黄紙「此清次郎儀利兵衛引合セ候もの共身元并貸附銀引當之品等利兵衛并市郎兵衛ノ相改候上相談治定可致旨兩人之者申聞候ハ、右ニ付貪ケ間敷儀無之様得と申含猶又心を付可申處無其儀右兩人に

担任セ置候故右之者共申合借方之者に者此者方之名代と申聞虚談を以金銀掠取候仕儀ニ相成其上此もの方ニ而茶たはこ等馳走いたし候挨拶と者乍申右掠取候金子とも不心付肴料之金子受納いたし候段旁不埒ニ付過料錢五貫文可申付候哉

更に、御定書同上條第四項に、

寛保二年條

一重キ御役人之家來と偽かたりいたし候もの

死

罪

とあるが、次なる二判決は、同様の犯罪に對する大坂裁斷である。

所で、寛延度の第五十一判決は、その未遂なるの故を以て、之を遠嶋に處したものと見られ、従つて既遂の場合、右御定書の規定同様、死罪であつたのではあるまいか。

しかし、次の天明六年の第五十二判決例は、他の犯罪と併合してすら尙ほ入墨輕追放にして、御定書の死罪と非常なる相違があるので、或は此點大坂にては、特則が設けられるに至つたかとも思ふが、しかし之にあつては、『御城代足輕召仕之者と申立』たるに對し、御定書上は『重キ御役人之家來と偽』たるの相違に、その刑罰の相違が原因し、法規そのものとしては、右御定書の第四項は又、大坂の原則でもあつたのではあるまいか（尙ほ）

「徳川禁令考」後衆第三帙五三〇
八頁文化二年の大坂判決參照

第五十一判決例（吟味御用落着書）二收録）

大坂奉行所刑事判決例二十七題

同○寛三年六月十一日落着」相使田中宇左衛門「申渡覺」佐渡嶋町和泉屋九右衛門借屋住吉屋半次郎同家父
 延三長次郎」其方儀公事出入有之町家に鉄刀を指罷越銀子貪掛ヶ候趣相聞召捕入牢申付遂吟味候處其方儀茶屋
 商賣致シ候ニ付何方之者ニ候哉當二月其方宅に一兩人參酒杯給候上土佐堀壹丁目新屋三右衛門義北堀江五
 丁目赤穂屋伊右衛門を相手取預ヶ銀出入之儀願出候趣噂致シ候を承リ候故伊左衛門別家之手代源衛方に鉄
 刀を指罷越知ル人ニ成候上組與力共に手筋有之候間銀三四貫目程指出候ハ、伊左衛門方出入利分ニ成候様
 可頼遣由申越候處不致得心ニ付源兵衛方に心安參候播磨屋半右衛門と申者を以又候申遣候得共何分不致承
 引候故其通打過候半右衛門義者使ニ頼候迄ニ而伊左衛門ヶ銀子貪可分ヶ取杯と申合候儀ニ者毛頭無之勿論
 其方義與力共之内に罷越候義會而無之候得とも伊左衛門方出入萬一利分シ裁許有之候ハ、相應之禮銀ニ而
 も可指越哉と欲心指發リ右之仕方ニ候由申之いまた不遂事を候得とも先方不得心ニ候を再應申遣與力共に
 手筋有之杯と不輕義を申立銀子貪掛ヶ其上鉄刀を指參候段兼而右躰不筋之義を相好候故之事と相聞旁不届
 ニ付濱嶋申付候」御池通貳丁目多喜屋利兵衛かし屋播磨屋半右衛門」其方儀長次郎使ニ被頼赤穂屋伊左衛
 門別家手代伊兵衛方に罷越候迄ニ而長次郎申合候筋一切無之旨申之其段無相違相聞ニ付無稱他國留指免候」
 右之通御仕置申渡候條一件并年寄丁人共可令承知候以上」午六月

第五十二判決例 (一) 諸吟味窺書寫」天明六年の分政録)

盜賊貳人并盜かたり事等いたし候もの組合ニ不入古銅賣買いたし候もの」御仕置窺書」(中) 右之者共御

仕置黄紙下札を以奉窺候以上「午三月」小田切土佐守「御城代阿部能登守殿御附札」此定七儀伺之通脇差
鉄刀取上ケ入墨之上輕追放可被申付候「黄紙」此定七儀御城代足輕召仕之者と申立錢かたり取又ハ組與力
之隠シ目附之無跡形儀を申無宿之身分ニ而脇差鉄刀を差徘徊いたし其上町家見世先之錢をも盜取候段不届
ニ付脇差鉄刀取上入墨之上輕追放可申付候哉」(略)

(10) 尙ほ、徳川時代に於ても、二重質入、二重書入、二重賣は犯罪であつた。而して、それ等は一の詐偽罪であると考へら

れるので、こゝにその記述をなすのであるが、「公事方御定書」下卷第三十七條「二重質二重書入二重賣御仕置之事」

〔徳川禁令考〕後聚第二帙五七〇頁の條第一項「寛保二年極一田畑屋敷二重に質入いたし候もの質入主中追放名主輕
キ追放加判人所拂寛保二年延享元年極但二重書入も同斷田畑屋敷建家等ハ初の金主に相渡後之金主にハ家財取上可相渡
尤名主加判人馴合禮金取候ハ、中追放後之金主存質地書入等證文取候におゐてハ江戸拾里四方追放」は又、大坂の原
則であつたと、判決〔徳川禁令考〕後聚第二帙五八一頁以下收録)を通して推測し得られるのである。

次に、前出御定書下卷第六十四條第三項「享保十七年極一巧を以人を打擲いたし同類之内より取扱物ねたり取候もの人
に疵付候ハ、獄門不得物取候共疵付候ハ、死罪寛保三年極但同類ハ中追放」は詐偽金錢強請の罪刑であるが、之と對照
するに適當なる、徳川中期の大坂判決を今こゝに掲げ得ない。只大坂にても、金錢強請(被久離者合力強請)が犯罪で
あつたことを知らしむる判決〔徳川禁令考〕後聚第三帙五二六頁)は見える。

横領の罪

勿論大坂に於ても、横領罪を罰したこと云ふ迄もない(遺失物漂流物横領に就いては、既に拾得物に關する罪の節に述べた)。

次に、受寄物横領（『横取』、『押領』）處斷例を掲げて、徳川中葉、大坂地方支配の此方面の法則を推察して見よう。

第五十三判決例 （『諸吟味窺書寫』天明六年の分政録）

賣可遣與申偽反物預リ歸質ニ入銀子遣捨候もの「御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」午二月十三日「小田切土佐守」去己十二月廿一日入牢兩國町阿波屋徳兵衛支配借屋和泉屋鶴之助同家代判庄八午四拾歳」右之者御仕置黄紙下札を以奉窺候以上」午二月「小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札「此庄八儀伺之通入墨敲申付朱書之通損失可被申付候」黄紙「此庄八儀屋敷方に可賣遣與申偽政五郎方ニ而反物預リ歸其儘質物ニ差入銀子遣捨殊政五郎より此者當時之居所相尋候節同家主鶴之助居所家號等を申聞此もの當時名を改居候儀不申聞置候始末彼是紛敷仕方其上質判組之者借屋相仕舞候儀も質屋に相盾置不申候段旁不届ニ付入墨敲可申付候哉

右の判決は、前掲「公事方御定書」下卷第三十七條第二項

寛保四年極

一諸商物代金請取其品不渡外に二重賣いたし
又ハ取次可遣品質に置拜賣拂或金銀横取いたし候もの

金十ハ拾兩より以上雑物ハ代金積
拾兩位より以上ハ

死

罪

金十ハ拾兩より以下雑物ハ代金ニ
積拾兩位より以下ハ

入

墨

敲

但先入牢申付代金又ハ商物ニ而成とも相濟候におゐてハ拾兩以上ハ江戸拂拾兩以下ハ所拂

の原則又、大坂の原則であつたと推測せしむるに足るものではあるまいか。少し後のもの乍ら寛政度の判決（徳川禁令考）後案第二）は、右の推測の當れることを證するものであらう。

次なるは、船員の積荷横領の判決である。

第五十四判決例（諸御吟味落着書留）所收）

卯〇延享四八月七日夕吟味翌辰八月廿三日落着「一破船與偽り積荷物盜取候一件」願人立賣堀四丁目伊丹屋權兵衛「積請之荷物盜取賣拂候者嶋津加賀守領分日州郡珂郡佐賀利村船頭吉兵衛」同斷千種清右衛門御代官所備中淺口郡玉嶋之者之由同茂右衛門「盜物を引請盜取候者之身分を見込偽り書付訴訟指出候者富嶋貳丁目大黒屋利助借屋鹽屋松三郎同家親藤右衛門」吉兵衛船ニ乗候加子富嶋貳丁目大屋忠兵衛借屋近江屋清九郎」同安治川上壹丁目尼崎屋庄兵衛借屋譜岐屋長兵衛」嶋津加賀守領分日州郡珂郡佐土原大井田村半右衛門」吉兵衛致難船候山浦手形差出候者 松平隠岐守領分豫州和氣郡三津濱南松前町神鳥屋久左衛門」片屋忠次郎」右吉兵衛儀伊丹屋權兵衛荷物日州々當地に送リ届候請負致シ材木炭樟腦積來候處豫州三津濱にて致破船荷物流捨リ候段荷主方に吉兵衛申參」浦證文取來候得共積荷之内防州ニ而買請候者有之仕方不審之旨權兵衛願之且亦鹽屋藤右衛門儀右吉兵衛所持之船引當ニ致シ銀子借置候處難船を申立船不相渡是又不審之由藤右衛門願出船頭吉兵衛同加子並右ニ携候玉嶋船頭茂右衛門願人藤右衛門儀茂仕方怪鋪相聞候ニ付入牢申付一件遂吟味

候處吉兵衛儀藤右衛門與者兼而致心安當表に茂度、罷出藤右衛門者舟方致商賣候ニ付吉兵衛儀廻船相求度存候得共指當リ銀子無之一旦國許に立歸リ廻船所持致し度旨領主に相頼候得者拜借銀度出候事故右銀子を以廻船可相調與存付藤右衛門懇意ニ致し候船頭茂右衛門を相頼此段藤右衛門に及相談ニ得心之上國許ニ而代銀渡候約束ニ而三百石積廻船を三貫貳百五十拾目ニ買請候筈ニ候得共銀子濟候迄者借リ分ニ致し當卯二月當表出帆佐土原に着拜借銀之儀領主に願候處船惡鋪拜借不出ニ付暫ク國元ニ居候内茂右衛門儀右船代催促として防州上之關迄參居候間積荷物積請次第右之所船繫リ致し候得共申越候故右權兵衛方に之送リ荷物炭六百六拾俵材木百拾九本樟腦貳桶船に積入同四月佐土原出帆上之關に參候得共茂右衛門者彼地間屋灘屋太左衛門方ニ罷在最初相對之通船代可請取申ニ付拜借間違候間暫待吳候様ニ申候處茂右衛門儀上之關逗留中之諸拂有之其上船代爲滯候而者以後之指支ニ相成候間如何様共才覺致候得與嚴鋪及催促候ニ付致方無之茂右衛門指圖ニ而積荷物盜取候筈ニ而同國室之津薩摩屋徳三郎方に參リ日州ニ而茂右衛門仕入置候炭大坂に積登候趣に僞リ途中入用銀指支候間買取吳候様相頼相談濟候上船に歸リ炭不殘揚候得與茂右衛門申ニ付不埒之仕方與申水主共指留候得共茂右衛門義惡敷様ニ者不致候間達而荷揚ケ致シ候得與叱付候故仕方無之炭四拾俵徳三郎方に遣代銀八百八拾目ニ候處銀子有合無之由銀錢ニ而貳百四拾目餘殘六百三拾目餘之爲代リ毛綿百貳反請取一右徳三郎手前令吟味候處右申口之通荷主ハ茂右衛門と承リ買請銀錢毛綿ニ而代銀相渡炭者直ニ方ニ賣拂當時殘無之由不埒成荷物與申儀曾不心付旨申之候(朱書)茂右衛門申聞候者積荷物不殘賣

拂其上ニ而大坂迄之内ニ船疵ヲ付破船之跡ニ致付荷と偽リ浦狀取歸荷主方申掠候得と申ニ付不埒與者乍存致同意茂右衛門一所ニ乗組上之關出帆同國柳井浦船繫リ致シ錢屋惣左衛門方に參リ是又茂右衛門荷主與偽リ材木貳拾三本代銀七百八匁壹分七厘ニ賣拂外ニ材木五拾六本程賣拂度旨茂右衛門俱々惣右衛門に頼候得共望無之與申ニ付質物ニ入銀子借請度由再應頼候處惣左衛門得心仕材木引當テとして銀四百目借請」惣右衛門手前遂吟味候處茂右衛門荷主之由申ニ付不埒之荷物與者不心付材木者無據相頼灘屋左左衛門方〔?〕之由承候ニ付不埒之儀有之間敷與存茂右衛門質置主惣右衛門請判ニ而同斷俵屋利左衛門方に質物ニ指入銀四百目借リ遣材木者其儘指置候由申之候〔書〕一盜物賣捌キ候代銀之内ニ而三百五六拾目程と毛綿百貳拾匁ハ藤左衛門に船代ニ渡候與申茂右衛門方〔?〕引取殘リ銀九百目餘ハ船具飯米其外上之關入用ニ茂右衛門遣〔?〕候其後茂右衛門者其所ニ而別レ候ニ付亦々同所沖之加室苦屋十郎右衛門方に材木拾貳本代銀宛と不覺吉兵衛自分荷物與偽リ賣渡シ候由一十郎右衛門手前様子相尋候處盜物與不存材木拾貳本直段貳百三拾六匁餘ニ極メ請取賣捌キ遣代銀相渡右之内拾本ハ賣先キニ其儘有之由申之候〔書〕一〔朱〕段々乗登リ五月廿八日之夜豫州三津濱迄罷越候處俄ニ疊リ方角難見分ケ同所之沖佐嶋磯に乘揚船底痛水船ニ相成積荷流捨リ候得共夜中ニ而致方無之舛〔原罪〕に乘移リ元船に繫〔誤〕キ置夜明候を待三津濱番所に罷越漕船出シ貫〔誤〕ひ濱手に漕寄キ改候上水主茂兵衛五兵衛を荷主權兵衛方に遣一此水主茂兵衛五兵衛儀荷主方に使罷越其後何方に罷越候哉居所不知猶又居所尋させ候得共行衛不相知候〔書〕一難船之様子爲知荷主之改を請其上ニ而破船場入用可相渡與

待合候得共沙汰無之殘リ、荷物材木六本炭九俵并水船成候船道具共三津濱役人ガ相觸入札取之惣銀高九百貳拾九匁九分六厘之落札ニ付右之内ニ而五拾貳匁九分九厘五毛御定之歩一銀渡シ殘銀請取致諸拂浦證文可取登與存居候内荷主權兵衛ガ下人兩人指越候ニ付破船場之様子委細申聞三津濱出立當地ニ罷登リ候由右荷物盜取候儀ハ茂右衛門申出無是悲致同意候由申候得共茂右衛門ニ不出合以前[?]日州積荷之内樟腦貳桶船に不積入以前自分調置候品與僞リ同國佐土原木挽孫右衛門方に錢八貫文ニ賣拂候由一木挽孫右衛門手前相尋候處右申口之通吉兵衛自分荷物與申ニ付樟腦貳桶買請代錢早速相拂今ニ所持いたし居候由申之候^(朱書)一纒之品候得者大坂に着後可償置存右之通取斗候事ニ而積荷物不殘盜取候存念無之上之關ニ而茂右衛門相談之上炭材木盜取所詮償難成程之荷物故樟腦茂流レ捨リ候與相僞リ浦證文認貫候由右申立候盜荷物之外者於難船場ニ不殘流捨リ候由尤乘組之水主馴合分ケ口遣候儀者曾而無之由船頭請合之荷物盜取荷主に者打荷と僞申拔可致與相工候仕方吟味之上無申披旨申之候ニ鹽屋藤左衛門儀吉兵衛相手取願出候船質證文致シ遣候譯ケ遂吟味候處當卯四月上之關ニ而茂右衛門ニ出合船代心當之拜借銀不相調旨申聞候得者右代銀未滯有之この書付念のため取置大坂に持歸リ藤右衛門に見せ度由ニ而茂右衛門認指出ニ付無何心致印形候外ニ證文者勿論書付等迄茂遣候儀曾而無之所持之船藤右衛門方に致質入ニ候儀者無之由申之茂右衛門義ハ吉兵衛申口同事ニ而上之關に參リ若船代不足在之者證文ニ爲致候様ニ藤左衛門相頼候ニ付質證文ニ致置候ハ、重而吉兵衛に掛リ候爲メニ宜と存吉兵衛ニ者船代滯有之書付と斗申聞印形押セ候事之由申之藤右衛門義上之關に茂

右衛門遣候段者吉兵衛茂右衛門申口同事ニ而盜物與乍存船代之内ニ毛綿請取其上茂右衛門取歸候證文船質與書記有之を幸に質船を破船與申立不相渡者吉兵衛仕方ニ工有之儀與事六敷願候ハ、右船之積荷物盜取候身分ニ恐レ下ニ而銀子可相渡與及出訴候由元來質船ニ而茂無之處偽リ成願いたし銀子可取與工盜物價與乍存銀子毛綿請取置候段吟味之上無申披旨申之加子清九郎長兵衛半右衛門右之者共者盜物代分ケ口取候儀勿論馴合候筋毛頭無之候得共茂右衛門吉兵衛申ニ隨ヒ荷揚之致手傳其上難船場ニ而も盜荷物之譯不申顯段無申披旨申之候ニ付右一件之者共吟味之趣を以酒井讚岐守殿ニ相窺候上左之通落着申渡ス(朱書)一船頭吉兵衛儀荷物盜取候者茂右衛門勸メ候由申之候得共其身船頭ニ而請負候送リ荷物賣拂荷主手前者打荷之趣ニ可偽與相工候仕方不届至極ニ付於川口ニ三日肆候上死罪獄門ニ申付候一船頭茂右衛門儀吉兵衛積荷物盜セ自分荷主與偽リ賣捌キ藤右衛門方ニ船代ニ爲渡又者入用ニ遣ヒ拾候仕方不届至極ニ付於川口三日肆候上死罪獄門ニ申付候一鹽屋藤右衛門儀盜物與乍存船代請取剩吉兵衛荷物盜取候身分を見込おとし候而銀子可請取與偽リを書付候訴狀指出シ候仕方工成儀重々不届至極ニ付見こりのため町中引廻シ死罪申付候一加之子近江屋清九郎讚岐屋長兵衛大井田村半右衛門右三人義乘組之船頭積荷物盜取仕方不届と存一旦指留候得共船頭不入聞ニ付仕方無之荷揚ケ致し候迄ニ而分口取候儀者勿論馴合候儀無之旨申候得共船頭ニ致隨身荷揚ケ之令手傳候段不届ニ付見こりため川口ニ而三日肆候上重キ追放申付候一神鳥屋久左衛門片屋忠次郎儀浦手形指出候仕方船頭馴合候筋茂不相聞候得共浦證文指出候儀者大切之儀ニ候處荷物紛失之吟味不精浦

證文指出候段不吟味之仕方ニ候以來可入念旨申渡ス」右之通落着申渡積荷物其儘有之者代ロ物ニ而取上賣
拂候分者銀子を以買主ノ取上願人伊丹屋權兵衛に相渡シ候事口書掛リ田中宇左衛門小泉伊左衛門

此判決に依つて、「公事方御定書」下卷第三十八條『廻船荷物出賣出買并船荷物横領いたし候もの御仕置之事』

〔徳川禁令考〕後
〔衆第二帳五八頁〕の條の第二項(但書)

同○寛保
二年極

一打荷或破船と偽荷物を致押領候もの

船	頭
上	獄
同	乘
水	入
重	墨
	上
	敲
	罪
	門

なる制規は又、大坂の原則でもあつた(水主處罰に於て、大坂方酷ではあるが)となしていゝであらう。

尙ほ御定書同上條第一項(廻船荷物出賣出買犯)が、大坂の原則でもあつたか否かを判定するに足る判決例を今擧ぐることは出来ないが、長崎奉行判決例集たる「犯科帳」(長崎圖書館藏)十四の第三十判決例(延享元年三月二十一日申渡)は、大坂奉行の判決記録であり、船積回送中の御用銅を拔賣せる船員等五十名に對する判決であり、その各人の刑罰は重追放家財闕所、輕追放諸色取上、輕追放雜物取上、諸色の中半分取上、申追放、百日戸メ、三十日手鎖、過料五貫文、叱と云ふ内容であつたことを、參考の爲めに附記して置き度い。

奉公人が使の爲めに持參せしめられたる主人の金品を持逃せる場合も亦、横領の一種と云ふべきか。

此種事犯に關する數個の判決を擧ぐるならば、

第五十五判決例 (諸吟味窺書寫「天明三年の分收錄」)

酒狂ニ而往來之者に口論仕掛候者并盜賊取逃「御仕置窺書」土屋駿河守」(中)「右之者共御仕置黃紙下ケ札を以奉窺候以上」卯二月「土屋駿河守」御城代戸田因幡守殿御附札卯二月八日下ル同十六日落着「此庄八十兵衛儀伺之通敲之上居町拂可被申付候」此庄八十兵衛儀酒狂之上往來之ものに口論いたし掛ケ追散并拳ニ而打擲等いたし所を騒セ候段不屈ニ付兩人共敲之上居町拂可申付哉「此喜八儀伺之通死罪可被申付候其外可爲朱書之通候」此喜八儀先達而盜いたし於京都奉行所入墨之上重敲山城國中拂相成候處又候船中并旅籠屋ニ而手先之品盜取候段不屈至極ニ付死罪可申付哉「此定八儀伺之通京都并大坂三郷罷在間敷旨可被申渡候」此定八儀使ニ爲持遣候金子之内取逃いたし候段不屈至極ニ付死罪可相伺候處喜右衛門儀定八は是迄貸附所ニ而召仕候者之儀不便ニ存候殊取逃候金子は早速受人ノ相弁候付定八は對無申分同人御仕置宥免之儀相願候間京都并大坂三郷罷在間敷旨可申渡哉「此宗兵衛伺之通敲可被申付候」此宗兵衛儀芝居見物并往來之女差居候品拔取候段不屈ニ付敲可申付哉「此長五郎儀伺之通敲可被申付候」此長五郎儀途中之盜仕候段不屈ニ付敲可申付哉

第五十六判決例 (諸吟味窺書寫「天明五年の分收錄」)

盜賊五人御構之場所に立入候者并銀高之取込仕候者「御仕置窺書」(中)「巳十一月二日入牢元大屋四郎兵衛御

代官所攝州東成郡天王寺村小歩行喜八同家當時無宿幸助 已貳拾四歲」右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候以上」已十一月」小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札」(略中) 此幸助儀雇主與八郎藤右衛門願之通御仕置宥恕申付大坂三郷井天王寺村ニ罷在間敷旨可被申渡候」此幸助儀雇主與八郎藤右衛門供ニ參候途中ニ而銀高之取逃いたし候段不屈至極ニ付死罪可申付候哉之段可相伺處雇主共儀是迄下人同前ニ召仕候者之儀不便ニ存銘損失ニ相成候而も申分無之由ニ而御仕置宥恕相願候間大坂三郷井天王寺村ニ罷在間敷旨可申渡候哉

第五十七判決例 (諸吟味窺書寫「天明五年の分政錄」)

盜賊兩人并取逃仕候者共」御仕置窺書」(略中) 右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候以上」已五月」小田切土佐守」御城下阿部能登守殿御附札」(略中) 此小三郎伊助儀主人藤四郎願之通御仕置宥恕申付大坂三郷罷在間敷旨可被申渡候」此小三郎伊助儀申合主人藤四郎取引先ニ請取歸候金高致取逃候段不屈至極ニ付死罪可申付候哉之段可相伺處主人藤四郎儀兩人共幼少下人ニ召仕候者之儀不便ニ存其上取逃金高も凡相揃有之不足之分も兩人之者請人共ニ相償候答ニ相對相濟候付旁無申分由ニ而御仕置宥恕相願候間大坂三郷ニ罷在間敷旨可申渡候哉

之等又、「公事方御定書」下卷第四十三條『欠落奉公人御仕置之事』(徳川禁令考(後集)第二帙七一頁)の條の第二項

享保廿一年
延享元年極

一使に爲持候品取逃いたし候もの

金子ハ壹兩より以上雜物ハ代金
ニ積リ壹兩位より以上ハ
死
金子ハ壹兩より以下雜物ハ代金
ニ積リ壹兩位より以下ハ
入 墨 敲 罪

なる原則と、大坂支配の原則とが、同じであつたことを證示するものとなし得られよう。

最後に、次の如き横領事件の判決例を、參考の爲めに出して置く。

第五十八判決例 (諸御用御窺書) 寶曆四戊戌年乃至十辰年の分收録)

寶曆七丑年(朱) 盜賊方磯矢市左衛門立合八田五郎左衛門(朱) 金銀取逃候者御仕置相窺候書付」細井安

藝守」井上河内守殿御附札伺之通可被申渡候(朱) 丑五月十八日入牢宿なし甚次郎當丑貳拾三歲」同日入牢同

斷忠助」當丑拾九歲」右兩人之者身分不相應之金子所持罷在候ニ付召捕吟味仕候處甚次郎者西信町河内屋

善六かしや光吉屋嘉兵衛忤忠助者船町依屋幸助借屋依屋佐兵衛忤ニ而兩人とも中仕働致シ甚次郎親子者玉

水町米屋左右衛門方日ニ立入心易候處當月六日立賣堀三丁目鹽屋久右衛門カ左右衛門方に差越候金四兩

銀壹貫八百五拾匁有之由ニ而請取來候様左右衛門申付候ニ付忠助同道致シ久右衛門方に罷趣右金銀請取候

處不斗惡心差發リ兩人申合途中カ取逃致し銀子之分不殘金ニ引替内金六兩程遊所ニ而遣ひ捨殘金所持罷在

候旨申之候」米屋左右衛門儀吟味不願出候ニ付呼出シ様子相尋候處兩人之もの行衛尋居候内右金銀高親共カ

弁段ニ詫候ニ付内分ニ而相濟メ遣シ吟味不願出候依之兩人之ものに對シ少も申分無之候間若重キ御仕置ニ

相成候事ニ候ハ、幾重ニも助命願候旨口上書差出シ申候(朱書)「右甚次郎忠助儀過分之金銀取逃候段不屈至極ニ御座候へ共米屋李右衛門方ニ者親共ハ償候由ニ而兩人之者_ハ對シ申分無之助命相願候旨申出候事ニ御座候間兩人共出牢之上三郷ニ罷在間敷旨可申渡哉此段奉伺候以上」丑五月」細井安藝守